



麻生路郎主宰

川柳雑誌



十一月號

事務所移轉

今般左記へ移轉いたしまし
た。
郵便物、送金その他社務一切
はすべて新事務所へ願ひま
す。

電話は變更しました。

電話南(75)六四九番
四二六九番

振替は従前の通りです。

振替大阪七五〇五〇番

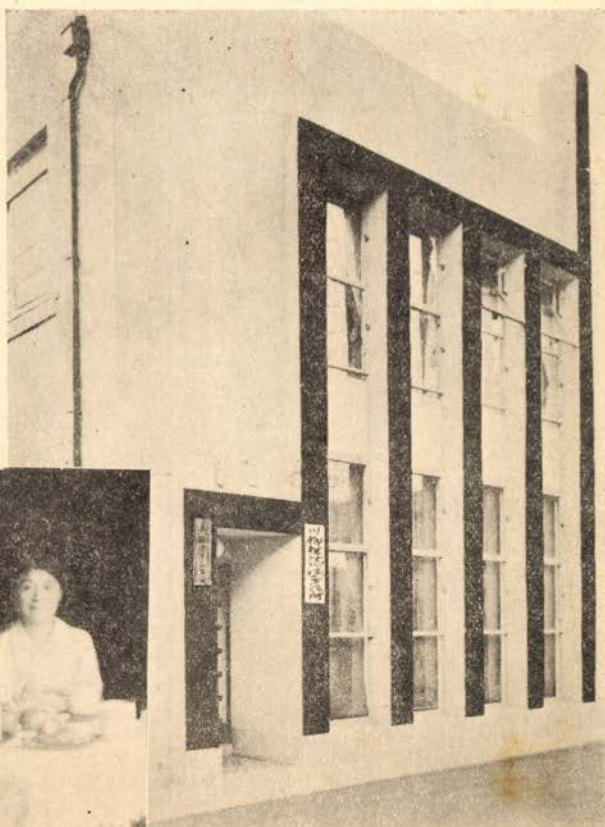
昭和九年十一月一日

大阪市天王寺區上汐町一丁目五一

(但シ上本町四丁目バス停留所西ノ辻南)

新事務所

川柳雜誌社



本社新事務所と最近の主幹麻生路郎氏夫妻



近作

麻生路郎

三男、洋をあづけて(三男)

子をあづけ紀州の景色眼に迫る
小包は寒さを思ふ品ばかり

紅葉寺にて

小波忌もう子の親になつてゐる
自重して編上げの紐結ぶに似

夜長

あの頃の明き書か抽斗を裏がへす



川柳雜誌第十一卷第十一號目次

表紙
 送字
 故拾
 故き
 鳥と
 不し
 重

文苑

柳誌ならぬ柳誌一二三……………麻生路郎(六)

武玉川二篇研究(七)……………梅本秋の屋
 森子東省二魚(三)

川柳の持つ限界(二)……………高須啞三味(七)

——主とし俳句との限界に就いて——

月評 金・銀・鐵……………路郎、紳樂、汀柳、
 華水、豆秋、新水、…(三五)

事務所移轉のこころごも……………麻生路郎(四)

「木枯や」の氣持に浸れ……………大窪文芳(四)

宿り蟹の墓……………西田紳樂(四七)

犬のデツサン……………岡田某人(五)

川柳バイロット欄……………福田山雨樓(五)



古 狸 窟 雜 筆 (八) 梅 本 塵 山 (六)

柳 壇 畫 報 (四)

川柳二十日含の記 不朽洞主人 (四)

川柳家戸籍調 山 雨 樓 (五)

創 作

近 作 麻 生 路 郎 (一)

近 作 柳 樽 麻 生 路 郎 選 (八)

川 柳 塔 麻 生 路 郎 選 (三)

粒 々 集 柳 秀 五 健 (四)

日 本 名 所 名 物 川 柳 大 阪 の 卷 (塚) 麻 生 路 郎 選 (五)

一 路 集 煙 住 田 亂 耽 選 (五)

枕 竹 内 機 見 女 共 選 (五)

本 社 風 水 害 慰 問 句 會 禿 山 記 (五)

各 地 柳 壇 柳 樂 整 理 (六)

西 之 町 メ モ 線 雨 (興) 編 輯 の 窓 山 雨 樓 (七)



東都柳壇の人々

右 辰田中不道人 前 三浦太郎九
 中 後川上三太郎 前 西島〇九
 左 後古谷 盈光 前 前田 峯那
 の諸氏(一九三四九、二 鎌倉にて撮影)

先日はおはがき恐
 入り升、扱かまく
 ら劍花坊の日五六
 人で手券して貴君
 を押しました、江
 の島へ引はつて行
 く種り何しろ三太
 郎君が夢中で犯人
 でも捕へるはさの
 騒ぎをやらさすの
 で、押す方も一生
 けん命自刃軍で退
 かける、そこに
 落こつてゐる仕な
 いかさいふあはて
 方さうく居ない
 ご分り、それから
 撫つた賢真が之で
 す、あなたが居ぬ
 のがくやしいが仕
 方ありません、
 なにしろ神田河
 ぞ寫つてゐるこ
 ろを一つ御らん
 に入れ升

〇九



送放の「評合ご講柳川」
君話の久文、野太小、人舟、雀雲、路夢、将水の社柳川歌響りと右の机中央
の葉伸、秋豆、戦乱、水新、穂雨山、那路の社誌柳川へ左りと脚の机中央
にてに鳥送放央中六時半七ま午四二 六 四三九一）君彦



家作流文の郵京
んさ英白田井



員々會同社吟りやき柳川都東
君潤川花田竹



たれさ藍袖に人阿島柳福社本
常 柳 訂 位 増



柳誌ならぬ柳誌一二三

麻 生 路 郎

東京から出てゐる『巖松堂展覧』と聞いただけでも、それが柳誌で無いこと位は百も承知の筈。それが近ごろ、ちよい／＼柳誌ならぬ柳誌の觀を呈するので、川柳に携つてゐる者にとつてはまことに愉快である。曾ては高須啞三味氏の「川柳といふもの」が掲げられ、それをそんなところへ掲げたまふで葬るのは勿體ない、一般川柳家にも讀ませてやらうと云ふ特志から川柳専門誌に轉載したことがある。そこで『展覧』たるものいささか得意になつた譯でもあるまいが、第四卷第六號（十月號）には『巖松堂展覧』の殆んどを川柳のために費してゐる。

先づ第一は前田雀郎氏の「十返舎一九と彌次郎兵衛喜多八」これは静岡放送局から放送された原稿であるが、氏獨特の研究になるもので十返舎一九と柳樽の序文から川柳に結びついてゐるものだ。第二は、品川陣居氏が「昭和川柳の定型派」と題し、おもひで三人集を埋草式に扱つたもの。第三は塚越正光氏が「川柳誌雜考」と題し「内地、鮮、滿、オール川柳壇展覧」の割見出

しを附し堂々二十七頁に亘つて柳界紹介の勞を執つてゐるのがそれである。

専門柳誌ですら、一文に二十七頁を割愛することは殆んど稀有に屬するのに、敢てこれをなした『巖松堂展覧』に對して先づ敬意を表したい。尤もその内容に就て個々に検討すれば、そのあまりに誤謬の多いのに、驚く人があるかも知れぬが、筆者が特に面白く讀ませようとしての事實上の相違は別として、筆者が特に面白く讀ませようとしての宣傳式文體が又その罪を一層深からしめてゐることも認識せなければならぬ。その點多少の無味乾燥さは忍んでも他日改稿の場合には獨斷的な批評を避けて、なるべく學者的な見地から執筆されたいものである。しかしながら筆者自らが一社に屬する川柳家である以上、公平無私な立場から執筆することはなか／＼容易な業でなく、これは誰が著手しても、かなりの難事業であつて、筆者がその誤り多きを自ら承知しながらも、先鞭をつけたその勞を多としなければならぬ。

今後、これを草稿として補正されるらしいことは筆者の追記によつても明らかであるが、さうなれば立派な柳壇展望としての使命を果たすことゝ信ずる。

西島○丸氏から「ほうすき」の第一號と第二號を送つて貰つた。第一號は「ほうすき」で第二號は「ホウズキ」である。第三號はどうするつもりか。一見してお金のかかつたお道楽趣味型の雑誌である。その點有閑階級にうつてつけの雑誌で、私なども閑と金がありあまつたら、羽根蒲團の中で、おもむろに一ページ／＼を繰つて見たい雑誌である。

定價もあつて無いやうなもので、第二號の編輯後記に「本號は俄然五十錢になり三號はいくらになるか同人子も不明な位の強ツ氣です云々」と云ふ實にいゝ氣な雑誌である。

本誌の同人は伊志井寛 坊野壽山、西島○丸、宮尾しげをの四君で、これを職業的に見ると役者に料理屋の亭主に、和尚に漫畫家と云ふ頗ぶる妙な取合はせではあるが伊志井氏を除く三人までが川柳家であるのと、立派に一家吟をのせたり、近藤館ン坊の遺稿の「川柳おめかけ評判記」を掲げたりしてゐるところを見ると柳誌としての匂ひがかなり濃厚ではあるが、誰がなると云つてもこれも柳誌ではない。

關西で柳誌ならぬ柳誌の一つとして「手」を擧げることが出来る。「手」の存在は「嚴松堂展望」の「川柳誌雜考」京阪神の柳誌表中にも一すべて不詳一として菊版であることだけが示さ

れてゐる。さうした鶴的な存在が「手」のすべてを表現してゐると云つてもいゝだらう。お膝元の私も何號まで出てゐるのか知らない。もと／＼「手」は私の懐から巢立ちした川柳家や私がある程度まで育てあげた川柳家が寄り集つて刊行してゐるのと川柳家を中心にベラ撒かれてゐるので柳誌かと思つてゐたら、いつの間にやら横町へ外れて、我々のやつてゐるものは川柳であつても無くつてもいゝのだ、いや川柳では無いのだと云うような鼻唄を謳ひ出したので、なるほどそれに違ひないと、私ももうこの「手」を柳誌の埒外に置いてゐる。中には川柳家としてのいゝ素質を持つてゐるものもあるが、いささかのぼり過ぎて川柳の眞實が掴めず、近ごろでは誰に讀ませる雑誌か自分達でもけんたうがつかなくなつてゐるらしい。

既述の「手」とは反對に、「魚」は南北これを編むと聞いたただけでも、劇の雑誌でも、魚屋の雑誌でもなく、柳誌の氣がするであらうが、「嚴松堂展望」が本屋さんの機關誌であるやうにこれは大阪中央市場の大阪魚株式會社の機關誌であるから面白い。

川柳は意外に尠く、刺身のケンほどもないが今に川柳がハバを利かすのではないかと云う氣がしてならぬ雑誌である。

斯うした柳誌ならぬ柳誌が、まだ／＼幾らもあらうが、要するに川柳の匂ひのする雑誌が陸續と刊行せられるのも、川柳が旺んになつた一證左であると云へば云へぬこともなからう。



近作柳樽

路郎選

金策へしげく雲が突いてくる

松山

耕一路

夕オール一つ濡れて乾いて獨者

早害の稲田へドライブの埃

茶店から雀へ梨のしんが飛び

寝がへりをうてば北斗はかたむいた

こひさみし糸瓜の花がしばみゐる

食欲のない秋風が眉を吹く

ひるの病院

まひるみんな黙つて梧桐の實が鳴る

腑はれてゐる身の氣樂ぐつすり寝

TOILET 喋つた酒の疲れが出

母のない子が新盆の灯におびえ

衣替へ南無三バスへ立ち戻り

神戸

愛ヶ池

同 同 同 某 同
人

同 同 縷 同 同 同
紅



石炭の匂ひおべつか者なりし
 あくびするやうないのちを與べられ
 凶作の雲が重たく浮いてゐる
 交叉點越えて女給の母は去に
 日歸りの客が亂した温泉の氣分
 仕事場へ晩のお茶が傳へられ
 小料理屋九月の風に中が見え
 晝の酒眞顔になれば淋しい妓
 貧しい娘十七八の戀をする

病める

びよういんのながいろうかの灯をみてた
 ゆめすてゝ落葉のみちを歩むなり

やめる明珠さんへ

子の夢は父と大波かむりたり
 ふし穴を覗けば詩人仁王だち
 そして秋勝手氣儘な溜息さ
 不平兒の後姿へ秋の月
 店員に風呂を焚かせて家族主義

長野

有為郎

大阪

大門

神戸

九葉

愛之池

静太

千屋山

同 沐天

高知

同 同 青果



飾り氣のない女房と火消壺
 南縁の幸福を知る白髮染
 故郷へ近く左遷に甘んずる
 香水をつけて女に甘へに來
 農家すぐに園の繭からはすむ愚痴
 自己欺滿嗤つた口元歪んだね
 秋の陽だカンカン帽も捨て給え

獨立開業

大汗をかいて賣れない日を歸り
 さんぐにのろけていつか眠つてゐ
 人格を雛妓らノツクアウトする
 勸進帳弾けて小言もなつかしや
 我校の勝利放送御苦勞さん
 ツンとした方の女に惚れてゐる
 父の服折目正しくあせてゐる
 叔父も來て愈々僕を押へる氣
 顔いろは讀まれてならぬ椅子に掛け
 梵妻の出す金欄の緋の衣

長野

大坂

松

和歌山

神戸

同 同 柳 兒
 同 史 呂
 同 雛 千 代
 同 同
 同 桑 南
 同 同
 同 朝 雨
 同 同



酒の座で話せば父もまだ若い
 顔色の弛みへ無心縫りつき
 烏籠の中の榮華を如何せん
 初夏の朝は新鮮なりンゴだ
 此頃の生活し眼鏡が落ちそうだ

路郎先生の私信に接して

温情の風は梢にふれるなり
 苦しめば苦しみ馴れてこんな顔
 くよくと泥が泌みこむ手相かな
 貝の殻拾ひ集めて故郷の夢
 三等に乗る混雜に慣れ切つて
 心配を忘れて氷二杯食ひ
 逃げ腰へ夜店大きな壁で負け
 なみだ甲斐なく頬を濡しぬ
 「にんじん」に泣いて來ましたコンパクト

父

さうかさうかと老眼鏡を外す

今治

臺中

竹原

京都

今治

史郎

同

耕朗

同

同

呂烈

同

同

丁路

同

同

輝親

同

同



亡き人に似た令兄の瞳がさみし

病院より久し振りの歸宅

家中が僕の歸つた音になる

科學者に適く冷たさが僕にある

高野山緑に喘ぐエロテイツク

人の死を悲しみに來て酔ふて居る

洋妾と聞いて見返へるニヒリスト

心境は生活線の日割にて

生きて行く道すれ腕に秒をきり

ぼけてゐるのも要領の一つです

默祈をして出勤の朝の呼吸

につぼんのおんなのちぶさまるいす

せんぶうき情痴すきまつくるなり

夏瘦へ眼帯いつそいたいたし

雨乞の踊へ星が降りそうな

汗かいてゐる外人の背が高し

酒はよし朝寢の出来る人と酔ふ

失戀にさも似て秋の雨を行く

堂ヶ濱

青鬼

神戸

港兒

大阪

新市街

尾籠

同 觀月

神戶

同 貧兒

今治

同 心府

高知

同 珍景

東京

同 薰舟



秋雨のポストが何となく親し
 こほろぎが鳴くと夜業の灯がともり
 十月の聲がかゝれば働かん
 雨を手にくけて孤獨に耐えんとす
 硝子窓ぼくのこゝろへ閉ざされる
 夏瘦を急にふけたと云はれけり
 後悔の頭丸めて來ると言ふ
 日當のその日暮しに秋が來た
 ひねくつて君の頭がなんぼする
 病人を慰めに來る赤とんぼ
 靜眠に生毛に秋の風が吹く
 トラツクを見送り茄子を積み直し
 自己宣傳の廣告ピラの薄くして
 飯の焚けない姫と空論
 校庭の蚊に落ちつけぬ防毒班
 自炊して氣兼ねなれた鯛焼く
 癒えぬ身へ秋風のしむ指の股
 ほのかな明りの中に祖父やせて居る

大和

藤ヶ池

竹原

松江

大阪

大阪

大阪

京都

神戸

今治

小

同 翠 峯
 同 流 之 介
 同 蛙 庵
 同 祥 月
 同 葉 光
 同 白 葉
 同 竹 雅
 同 吉 左 右
 同 小 樓



炎天にお地藏様の笑顔みる
 溜息へみんな他人の顔でゐる
 寫眞帳達者な時もありました
 胃を病んで来たに湯の街灯があかし
 秋風がはたご泊りの背に来る
 貞操を女給論じて面白し
 酒に寝る父みつめてる母なき娘
 日向ぼこする女の髪の毛のうすき
 につこりともしない大僧正さま
 榮轉のうわさに庭の木が青い
 眼の色を變へる男で恵まれす
 樞しづくひぐらしが鳴く
 打水につないだ仔犬邪魔になり
 ハイキングあんな所で炭を焼き
 久々の鬚乳呑子にながめられ
 秋は殊更心を癒やすすがなし
 中元と別にこのたび金が要り
 金がないからだまつておかう

高知

石川

竹田

壺ヶ池

松江

大取

同

神戸

今治

同 映 珠

同 しとし

同 春 帆

同 巷 巴

同 粹 句 樓

同 素 月

同 彩 泡

同 好 啓 兒

同 都 留 逸



妹に金拂はせる面白さ
 料理屋のつけが浮いてる水溜り
 脱退の足場が狭い會議室
 媚を賣る女となりぬ柿の色
 不平をば秋の夜空へ捨てに出る
 忍従の母を笑つた事もあ
 掛取へ詫びる姿を子に見られ
 汗臭き身であり病ひ長びかん
 かみ剃の音も嬉しい日となりぬ
 利權屋が左ぎつちよで靴あけ
 日曜の陽に背の骨も伸びけらし
 百姓の朗らかな秋芋の秋
 風あり棧の虫のひげ
 西瓜賣り談義のわりに味知らず
 伊太利から至急親展手紙が來
 生きてゆく十九の姉の乳バンド
 轉居して淋しいものに猫の顔
 せめてもう一坪ほしい臺所

高知

今昔

竹原

壺ヶ池

松江

岡

高松

名古屋

大阪

同 青 雨
 同 きよし
 同 彌 生
 同 白 蝶
 同 梟 人
 同 勁 一郎
 同 柳 夢
 同 令 風
 同 銀 波



地の底の母を思はず柿の色
 下野するを待つてましたと検事局
 高下駄をはいて税金掛にゆき
 立つ秋の西陽が淡い療養所
 女の子團扇の花へそつと泣き
 退院のその日限りの戀でした
 氣やすさは浴衣一枚親子で着
 日給の汗を自慢で生きるなり
 活花の宗家と言へる未亡人
 艶やかな母晩酌を少しうけ
 頑な父へ見事な菊の出来
 振り返る窓に微笑む糸切齒
 拔擢も無く先輩の靴の減り
 高島田結うてアツバツバの藝者
 酒屋の段かたり終つた素湯を呑み
 涼しさを鞆につめて山を下り
 ある時は骨となる身を考へる
 帯にまで秋草模様朝の冷へ

阿

京都

豊後

相模

奈良

竹原

松江

大

同 末廣 艸

同 清春

同 孤鶴

同 梨生

同 葉魚

同 同 泉

同 同 行

同 同 路

同 同 波

同 同 静

同 同 波

同 同 波

同 同 波

同 同 波

同 同 波

同 同 波



屑籠の中に可愛いこほろぎよ

わが影の長さ村の子横切りぬ

剃り立ての顔へビールが澄んでゐる

ソブラノへ止めとは云わず父は逃げ

祖母の氣に入りて世間にうとくゐる

つゝましくガラス拭いてる泣黒子

灯がつけば虚偽の世界となつてゐる

商賣と違ふ無駄口叱られる

應援と別に他愛もなく負ける

子の愛に生きるすがたをおがむなり

四國へ出張せし父へ

金あれば面白からう父なるに

伊吹山登山

草の息木の息ランブゆれる息

子を抱いて久しいえくぼ見せて酌ぎ

倫落の夜髪の毛が俯向いて

濡れて来て戀のつかれをわすれよう

花氷遠くによけてソーダ水

兵庫

同 天 秋

京都

同 白 英

金澤

同 緑 水

竹原

同 ひ さ 志

愛ヶ池

同 松 生

同

神戸

同 久 米 雄

大坂

同 天 國

同

同 た け を



留守番にいつたを避暑と思はれて
 念佛の出る日の祖母のよい機嫌
 大望があるとは見えぬ瘦せつぼち
 秋深き心や菱の實を採りて
 コンサート皆嚴肅な顔でゐる
 部屋秋にしたり軸には支那朴婦
 童女等のはなし色情じみて居る
 から振りも又歡聲となつて晴れ
 闇泳ぐ女だまつて笑つてた
 二度と來ぬ客と知つてる旅の宿
 富士五湖
 山中湖ヨツトがあつて親しめず
 白日の夢に女は疲れれてゐ
 たくましき妄想に酔ふよるのそこ
 ちちははにそむき頭をだいてねる
 歸省して
 故郷は冷たき空氣して早天
 商才を秘めてピールの群れにゐる

名古屋

今

三重

埼玉

大阪

同

今治

神戶

同 絃 靖
 同 一 風
 同 紅 桃 子
 同 い ね 三
 同 利 生
 同 節 子
 同 紫 陽
 同 鱗 次



ジャズ止んで傘を忘れた客があり
 新秋を郊外に住む有難味
 ハイヒール素足ではいたモダニズム
 鬨焼く母の背中の小さくて
 夫婦喧嘩ヘラデオの伴奏
 遠来の飲めない友を持って餘し

南陽館にて(十銭萬歳)

十銭の値打を知つた面白さ
 再縁の話風鈴しきりなり
 言譯をせぬで姑疲れて來
 女事務爪に白粉残して居
 興奮の中に分別顔もあり
 苦勞したことも手相見云ひあてる
 妻と云ふ慎みももつ柄を選び
 口笛の音律牛の乳が張り

出産近し

非常時だ男の子をと祈るなり
 むねやめば淋し今日秋立つとかや

大阪

同 清美

同

同 一青

同

同 三男坊

今治

同 國彦

竹原

同 左傳

大取

同 木圭

兼川

同 琴月

丹後

同 木患子



義兄の弟子獨立す

打てばその響も自己のものである
睦じさ遂にインキがこぼれたり

村の盆踊りを見て

裸シヤツ、浴衣、アツバツバが踊り

晝のサイレン、ハブラシクはへたシニミーズの女

冬帽のリボンなかから市電パス

すれちがふ故郷の娘からかふことを知り

徴兵検査より

張り切つた顔して甲種歸り來る

難産の猫へ近所が二人來る

失業の第一日は晴れ渡り

殉職の美談が生めぬ検査醫

夕立に千日前が底を見せ

銀幕に秋の氣配を知るひと夜

甲子園母校の出来ない氣の輕さ

面とむかへば何んにも云へぬ弱さです

手枕の重みとなつて子の寢息

大阪

同 雅星

同

同 正一

同

同 玉格子

同 えいを

同 愚堂

河内

同 いの助

大阪

同 双亭

奈良

同 義風子
小松

今治



おくれ咲きなる朝顔のこましやくれ
 夜店の灯一人の客の氣が長い
 生命を輕んじ財布はたいてる
 時をわきまへず正直しかられる
 鏡ごし秋の空みて泣いてみる
 秋風へボートの腹もつかれ切り
 戀人の顔がダイヤに見えて來た
 紅い腫兔さんにも秋の空
 釣竿が今日は課長と歩かせる
 疲弊した村から錦紗の娘來る
 失職のこの頃肥えてゐる生活
 當然の辭表を出しておしまれる
 義理と言ふくさりのはしに居るわたし
 自尊心殊更青い顔でした
 盃の底にちよつびり嘘がある
 小作米納めたあとの淋しさよ
 ぎつしりと首の塔なり甲子園

再會のS子

神戸	名古屋	大阪	河内	藤ヶ池	和歌山	松江	今治	名古屋	大阪	同	堀	今治	松江	今治	竹原	大阪
木通	嵩喜固藁	奈里	不路子	規美子	百文	洋二	蛇之助	三八朗	世間音	臯山	曲豆	十靜	文兒	伶人	法輪	トミヤ



斷髮が無言で俺にそむいてた
 父親の缺點も知る年となり
 あぶ蜂あぶが雨に濡れてる風仙花
 赤飯に眼鏡嬉しく曇るなり
 糸屋の奥で誰やら三味を弾き
 盆おどり差す手にわざとせなをつき
 山深み二度と来れまい煙草にし
 此頃を泣いて笑ふて膳につき
 沈黙を守り冷い飯を食ひ
 風などは何んにも入らぬ女中部屋
 父ちちも一歩ゆづつた箸を取り
 菅笠が一人で動く稻の丈
 出棺だくわんへ二町内すすでに酔ふてゐる
 電欄柱を撫で、疲れた戀心
 故郷にこんな娘もゐるかいな
 昔の戀をコスモスの香にも知り
 高利貸算盤枕に晝寝する
 がむしやらに頭をかいてどうする氣

今治	東京	竹原	同	同	大阪	今治	清水	松江	豊ヶ池	同	大阪	名古屋	今治	足ヶ崎	奈良	同	
禧	一	素	碧	洋	正	美	五	御	醉	美	牧	丁	笑	パ	天	青	有
純	柳	描	園	三	夫	千	所	穂	夢	智	人	子	巴	ツ	柳	柿	魚



隣の妓バスの中では挨拶し
 月給の安きを非常時なりと云ふ
 ふるさとの遠きを想ふうろこ雲
 傷ついたこゝろへおどけたサキソフオン
 素見して清水人形買ふ若さ
 星すめり明日の日課を夢みる子

×

句はその人のところである。十七
 音字はその人の姿である。リズムは
 その人の呼吸である。一句一句味つ
 て見たが、のんびりさが足りない、鋭
 さが足りない、朗らかさが足りない、暗
 さが足りない、軽妙さも壯重さも
 鈍重さも足りない、艶ッほさも、枯
 淡さも感傷味も諧謔味も足りない。
 これではまだくげない。その病
 源が何處にあるかと云へば生活の機
 械化にまきこまれるからである。役
 者自身が笑つては喜劇が逃げる。そ
 れは喜劇役者にとつて致命傷である
 颯風は颯風で吹かさねばならない。

吹いたら驚かればならぬ。そんな時
 に眼を伏せてはならぬ。颯風が吹い
 ても、颯風を金儲けの種にする人は
 普通人と別の神経が働いてゐるので
 ある。私たちは颯風のように音をた
 てて来ないもので、モツと怖しいも
 のに、毎日の様に直面してゐる筈だ
 が、それには氣づかないで、風や水
 や火にだけ怖れたり驚いたりしてゐ
 る。それではいけない。
 それから、狭い自分の周囲ばかり
 を詠つてゐる作家は時々、そこから
 離れて見る必要があらうし、あちこ

大 阪 冬 籠
 同 伊 紗 緒
 今 治 比 呂 史
 神 戸 勝 太 郎
 大 阪 花 鳥
 同 ら い 水

ちに、眼を心を奪はれ勝ちな作家は
 少し自分の手近に眼や心に向けて
 見る必要があらう。と云つたような
 ことも思はされた。

丁路君の「心配を忘れて氷二杯食
 ひ」は叙法は陳いが、人間が出てゐ
 る。この人間といふものは人物とい
 ふ意味ではない。久米雄君の「草の息
 木の息ランブゆれる息」は、追つて
 来るものがある。不路子君の「時を
 わきまへず正直しかられる」はい、
 作者自身、正直にものを視てゐる。

(路)



評月

金

★

銀

★

鐵

路郎、山雨樓、
豆秋、華水、新水、
艸樂、汀柳

朗な朝よ子供の齒が二本

晴 朗

新水——子供の句が三つならんでゐて、みんな好きです。

路郎——これはいゝ。

新水——實感句で、子供の句も多いですが最近でも最もすぐれてゐると思ふ。家庭川柳として、是程愉快な事はないでせう。

華水——お誕生近くで一番可愛い、時分、何等わたかまりない出勤前の風景がよく表れてゐます。

山雨樓——この句の表現から見て「朗な朝よ」と大きく唱ひ、そして「子供の齒が二本」と小さくまとめてゐる處は、無技巧の技巧と云つた巧みさがある。句主晴朗君は、お目

に掛つても大變朗な方で自から句にキヤラクターが現れてゐるものと思ふ。

艸樂——皆で言ひつくされてゐますね。こ

う云ふ咏嘆的な句は、川柳味が失はれる傾きがあるんですが「齒が二本」と云ふ現實的な事象を持つて來て、「朗な朝よ」とまとめな點、大變朗な川柳味が出てゐる。

路郎——「子供の齒が二本」と云ふ敘法——

「齒が二本」ですべての風景をはつきりさせてゐる點が、この句の手腕である。大體多くの句と云ふものは常套的なものをくつつけて纏める習慣があるが、この句等は斯うした極く特殊なものを捉へて來て、句に生命を與へてゐる點が作者の腕である。

指みんな延して觸れる日本鬘

しとし

華水——ホツアヘヤやモダンガールの多い今日此頃に、昔のありふれた日本鬘を句にして、女のたしなみである美への觀念を

風景に表して、その細い指の線まで出してゐる事は、この句を價値づけてゐると思ふ。

艸樂——華水氏の説に賛、尙結立の日本鬘の句ひのこまやかさ、鏡臺に向つて鬘の恰好に手をふれてゐる姿態など、そんな風景まで思はれる。

路郎——寫生句としては相當細かい觀察を下してゐると思ふ。

新水——女は髪を自分の生命とも思つてゐる點から、其處を見付けた處が、この句の

技巧と思ふ。

山雨樓——只難を言へば、下五日本髷としてある點から句の穿ち味が克つて、何だか課題吟の場合に、よくものする句の様な嫌ひがある。

汀柳——欲をへば、日本髷を丸髷とか島田とかはつきりしたら、もう少し状景が出ると思ひます。

山雨樓——その意味で少々概念過ぎるさうひが有りますね。

汀柳——調子は日本髷でいゝんですけどね。

新水——高島田は如何です。

路郎——何にしても、この句は要するに女の変態の一場面をスケッチしたと云ふに止つて、それから何物かをつかんで、みせてくれてゐないので、川柳として物足りなく思ふ。つまりつゝ、こみ方が足りない事が言得られると思ふ。

艸樂——結局つゝ、こみ方が足りない事になるんです。この句の作意では、髷は何でもいゝ、日本髷、あればいゝ、つもりなんです。つまり作者にもう一つ欲がなかつたわけです。實感はあるんだが、句をまとめる時に「日本髷」とやつてしまつた。この句の作意は「指みんな延して」の點だと思ふ。

食ふ喋る女の群と乗りあはせ

丁 路

艸樂——遊山季等郊外電車で、よくこんな事がある、實際こんな女の群のまん中にも坐ると、女と云ふ者は、うるさいもんだなあとと思ふ時がある。そんな時の状景を軽く表現したい、句と思ふ。

山雨樓——軽く表現したと云ふ説は賛併し見方に於て、皮相を免れない。

新水——社會は、こうしたものが、川柳としてあまり状景が表れすぎて、反つて面白味がなく、つてゐる句である。

艸樂——僕の觀察する處では、「食ふ喋る」と云ふ表現で、うるさいと云ふ感じを出してゐて、うるさいとか大仰な言方でなく、軽くして、うるさい氣持を表現して處に成功してゐると思ふ。

山雨樓——つまりありふれた事實と云つたものが先に感じられて、新水氏の述べられた如く、句の味は少い。何ちらかと云へばそふ云ふ場合に出會して、大變迷惑してゐる内氣な男の性質がうかゞはれる様だ。
華水——諸氏の説く言盡されてゐますね、こう云ふ経験が、特に夜行列車に乗つた時などありすぎる。

ギヨロリツと見廻し乍ら厩屋来る

素 月

豆秋——厩屋が來る態度は實に「ギヨロリツ」との表現にピッタリして面白いと思ふ。

山雨樓——「ギヨロリツ」とは「ギヨロリツ」の説かも知れないが、此の場合、確定的な射てゐる。

艸樂——「ギヨロリツ」とは少しきつすぎやしませんか。例へば、うんくささうな目で眺めながら來る拾ひ屋の如きものがある。何かないかと眺める風な——。「ギヨロリツ」とは厩屋の場合少しぎつくないかと思ふ
山雨樓——それは厩屋の中には普通の厩屋商賣ばかりでなく、時には、そこいらのものを失敬する様な手合もあるので、この言葉に依つて、そう云つた厩屋の陰慘な後姿がうかゞはれ句に深味をもたせてゐると思ふ。
華水——直し屋とか鬮屋とか、定つた顧客のない、何處からか呼ばれるのを待つと云ふのでない厩屋の氣持を表すのに、「ギヨロリツ」との言葉を用ひてよく出てゐると思ふ。
艸樂氏説のあまりきつすぎると云はれたのは反つてこんな立派な家であれば、掘出物も多くあると云ふ考へから見るとではないだらうかと思ふ。

路郎 當百君の句に「日がな一日紙屑はな

いかれ」と云ふ句があるが、當百君時代の紙屑屋をよく表してゐると思ふ。のんびりしてゐるが、それから時代が経つて、紙屑屋が悪化したのか「ギョロリッ」と見廻し乍ら來るのがあるにはあると思ふ。寫生句として時代相を表してゐると云ふ事は云得られるだらう。

新水——全て行商人をうきなくく見た句であるが、商賣人としては、又商賣大事にかうした目の付け方もあるのだらうと思ふ。

路郎——それに、紙屑屋と云ふけれど、此頃は紙屑を出す、紙屑は取扱はないのが多くて、何か、がらくたいも欲しいと云ふ處から其處等をねめまわしくゆく人相の悪いのがあると思ふ。私の家へ來る、相當永い同馴染んでゐる屋敷も、その一人である。

千圓を持つて死んだ一錢をもつて

生きてゐる

遊舟

山雨樓——一寸珍しい表現で破調であるのみでなく、觀點が變つてゐる。やゝ極端なコントラストを示して、或る人生を凝視した句である。惜むらくは觀念的な見方が、かちすぎである。

路郎——此の句を見ると、成程面白い對照を扱つてゐるが、問題を、投げてゐるだけで、作者の解決がみられない。どこかに、作者自

身の持つてゐる思想がみられたら、一層面白からうと思ふ。

艸樂——山雨樓氏が云はれた、觀念的なと云ふ評は同感。何ちかかと云ふと、藝術的な感じより格言の感で終つてゐる事が惜まれる。

山雨樓——一つ、近頃自由律の問題が盛に論ぜられてゐるが、一途に、詩と云ふ立場から、ぎこちない、短詩の一節と云つた自由律に興味を持つものもある様だが、この句なんかは自分の詠はうとする處を、大膽に言ひ切つてゐる。その點で句としてのリズムがよみ下して左程の、不自然を感じない。言葉が躍つてゐると云つた點から所謂自由律の句とは違ふと思ふし、斯う云ふ、行方の句なれば破調、許されていゝと思ふ。

艸樂——もつと要約した含蓄ある言葉を、用ふれば、リズムカルな句にして、出來ない事はないと思ふ。つとめて、調子と云ふものに一應努力してみる必要がある。

山雨樓——テッサンと云つた感じがします

新水——この句の破調は直ると思ふ。

山雨樓——下手にやると失敗しますよ。

艸樂——死んだ生きてゐると云ふ表現ですれ、一方だけで一方を言外に含めると云ふ手法をとればどうか。

路郎——作者は、どつちが、いゝのかが、はつきりしない。千圓を持つて死んだものもあり、

一錢を持つて生きてゐるものもあると云ふ對照にすぎない。

姉の日に他人ごなりし家を訪ふ
朝雨

艸樂——「他人となりし家を訪ふ」は相當思切つた言方で、斯云ふ、正直な言葉を使ひ得らるゝ人物がうかゞえる。

山雨樓——姉の嫁いで居つた家の、冷たさを感ずる。

路郎——可成り鋭い觀察だれ。

艸樂——鋭いですね。

新水——言ひ切つてゐますから、路郎——普通から云へば、憤りが出る處を、靜にその境地が出てゐる點、この作者の、非常に頭の進んでゐる事がうかゞはれる。

山雨樓——さう云つた家を、わざ／＼訪ふ作者の、いた／＼しい中に、ものやさしい氣持も、うかゞはれる。

華水——憤怒を隠した姉弟愛の表現ですれ。
豆秋——作者の實感でせう。
路郎——でなければ、一寸出ない句だれ。
僕も非常に愛してゐた姉が、死んだ經驗を持つてゐるが、幸にして、甥が、一人つながつてゐるのと、姑と僕とが非常な親し味を持つてゐる爲、斯うした氣の毒な目を見ずに濟んでゐるが、この句を、靜に味はつてゐると、ヒヤリとした、又物を見せられた様な感じがする。(於里十九居 丹路筆記)



川柳の持つ限界 (二)

—主として俳句との限界に就いて—

高 須 啞 三 味

さて、川柳と俳句とが、内容に於て相近づきつゝあるといふことは、前述諸家の言のやうに、俳句は季題を捨て、客観的描寫の立場から、主観的描寫へ進入して來ると共に、川柳は、その社會人情を寫す領域から、自然風物を寫す領域へ進入して行く結果であつて、そこに劃然とした國境がなければならぬと考へる人達にとつては、これは實に憂ふべき現象に相違ないのである。

最近、私と品川陣居の友人であり、ホトトギス派の俳人として聲名ある帝大教授(工學博士)の山口青邨君が、自分の句集「雜草園」を著したが、その中に

香取より鹿島はさびし木の實落つ

實朝の歌 ちらと 見ゆ 日記 買ふ

一本の煙草くゆらし梅を去る

などの句があるに就いて「俳句研究」八月號の「俳壇時評」で加藤秋邨氏は、さういふ主観句の存在を是認し、次のやうに論じて

ゐられる。

「これらの中には、自然の外に、作者青邨氏が嚴として存在してゐるのである。生活し、考へ、たのしむ一人の人の心が感ぜられるのである。人あるひはかゝる小主観はこれを滅却して、自然の靜寂に悟入すべしと説くかも知れない。然し、私はこの傾向に限りない興味を覺える。従來、日本人はあまりに多く自然への悟入を強ひられすぎた。悟りきつて安住した心も尊い。そして自然にひたりきつた作品にも心はうたれる。然し生きて憐み、悲しみ、喜んでゐる個の人間の心には、それとは別の意味で、近い親しみを感ずるものである」(筆者摘記)

これはいはゞ向うの陣營の言葉である。「主観句可なり」といふことは、俳句の川柳境侵入可なりといふことになるわけであるが實に面白い議論と思ひ、私も友人青邨のためばかりでなく、一つの妥當な議論として大いに賛意を表する次第である。併し、それ

を逆に川柳界の問題としたら、ごうかといふことになる、それはまた少し違つて来る。

由來、川柳は俳句の自然詩に對して、人事詩とされて來たのである。そして、俳句の客観描寫であるのに對して、川柳は主観描寫であつた。て、先年、高濱虚子氏が

「俳句は、花鳥諷詠詩である」

と定義された時、私はすぐそれに對して

「川柳は、人情風俗詩である」

と定義した。昭和八年五月の「柳友」(参照)

この二つの定義は、何方も相當問題になつたが、俳句界の反對は却々大變であつた。それは大體——俳句といふ大きな短詩の問題を、虚子氏個人の觀念で断定されては迷惑だ。現代の俳句は、もう花鳥なんぞを諷詠しては満足してゐられないのだから、さういふ小さな定義には服してゐられない——といふのであつたが、虚子氏は——俳句は、自然詩であるから、如何なる思想でも、俳句の形式を通して表現する時は、自然が主とならなければならぬ。で、それを一言でいふためには花鳥諷詠といふより仕方がないのだから、花鳥といふ言葉を狹義に解釋した反對などは問題にならない——と、殆ど問題にしなかつたのである。

それと同じに、私の定義に反對した人も、主として「人情」といふ言葉と「風俗」といふ言葉に拘泥して——現代の川柳詩は、單なる人情や風俗を詠ふものではない——と抗議されたのであるが、私もまた虚子氏と同様——人情風俗といふ言葉を狹義に解することをやめて、人情すなはち人間の心、風俗すなはち生活と廣く考へたなら、この定義を無理に否定する必要もなからう——と

説明したのであつた。

史的に考察すれば、俳句も、川柳も、もとは俳諧である。併しそれが分流し、各々が獨立してからは、俳句は自然を相手に客観に、川柳は人事を相手に主観に、各自その個性をかためて來たのであつた。で、今になつて、俳句が客観だけでは物足らず、主観に足を入れても、そこには或る限界がなければならず、また川柳が主観だけでは千篇一律すぎると、客観に手を出さずしても、やはり或る限界がなければならぬ筈である。俳句評論家が——俳句が一個の心を詠つても、少しも差支ない——といつた問題を、川柳に移して——川柳が自然を詠つてもいいではないか——と言はれると、私は無條件に——それはいい——とは言ひきれないものである。そこが少し違はなければならぬと、私は考へるのである。

道照へば 一度にうごく田植笠

(柳橙初篇)

草の庵堀りもちにきりぎりす

(同 二篇)

鳴子引子の愛想に 一つひき

(同 三篇)

これは、季もあり、扱はれた材料も俳句の風物であるが、表現されたものは何處までも川柳である。すなはち、自然を見る眼に川柳的な觀察が加つてゐるからである。

紅葉の 中へ 幅な入相

(武玉川初篇)

松風の裾わけをする萩の上

(同 二篇)

栗の花ほうけて 震も草の音

(同 三篇)

これは「武玉川」の句であるから、これこそ川柳だ、とは言ひきれないかも知れないが、少くとも俳句よりは川柳的な句である。自然を川柳的な眼でみた句である。言ひかへればこれらの句は、

俳句らしい表現はしてゐるが、内容的には川柳の領域から踏出し
てゐないのである。所が

姨捨はあれに候とか、しかな

錢箱の穴より出たりきりぎりす

寝ばなしの足でなり／＼る鳴子哉

一 茶

これはどうか。川柳と紙一重ではあるが、ちやんと俳句の領域
を守つてゐて、私の言ふ「或る限界」は犯してゐないのである。
俳句らしからぬ俳句ではあつても、決して俳句に似た川柳ではな
い。また

庭草に 螢ともりぬ 雨のあと

少しづつおくれて落つる 雪霽

四阿の柱をめぐり 草萌ゆる

これは「雑草園」の句であるが、これを現代の川柳家の川柳と
くらべて見るが、

紫陽花に 洗濯もの、落葉

草の丈築地くづれを手の出入

松林 磯の 香がある 停車場

前の三句と、この三句と 何方が川柳で、何方が俳句か、ちよ
つとは區別しにくい位であるが、底を流れる俳味と柳味は、たし
かに判る者には判るのである。すなはち「或る限界」は、何方も
きちんと守つてゐるのである。

そこで、その「限界」のことを言はなければならぬが、要約
して言へば簡單のことである。前にも書いた通り

「俳句は、自然を對象に、客観描寫體をとり」

「川柳は人事を對象に、主観描寫體をとる」

もとを同じにした二つの短詩であるから、如何に俳句が川柳に
似て來ても、その自然對象の客観體の限界を何處かに殘して居り
また川柳がどう俳句じみて行つても、その人事對象の主観體を、
はつきり捨てきれぬ以上、俳句にはならぬといふのが、私の主張
である。

これは、ちよつと前にも觸れたが、本誌八月號の「夏の論陣」
の S. R. 氏も言つてゐられる通り——定義の有無に拘らず、俳
句と川柳と混同するといふ心配はいらない。そこには微妙な差が
嚴存する。それは、自得さへすれば、誰にでも判ることだ。（筆
者換言）——といふ言葉に盡きてゐるのを、例の穿鑿辭から、一
應穿鑿して見たのである。些でも川柳家諸君の參考になれば幸甚
である。

それで、この小論を終るに當り、或る大先輩が言つた——川柳
家の作つたものが川柳で、俳句家の作つたものが俳句である——
と云ふ言葉は、好謔ではあるが、好譽でないことを言つておきた
い。私に言はせれば、

新社員背廣を著つ、年少き

山口 誓子

これはこれ獨稽古の將棋盤

小穴 隆一

なごは、たとひ「俳句研究」に發表されてゐても、俳句ではない
と思ふし、或る有名な川柳家が、私にくれた私信の末尾に書いて
よこした

紫陽花や塀のすそ行く塗足駄

の如きは、決して川柳とは思へないからである。

昭和九年八月九日



武玉川二篇研究 (七)

梅 本 秋 の 屋
 森 子 東 省 二 魚

(219) 新地の間夫に蚊柱がたつ

東 魚 新地—中洲の假宅であらう。間夫は引ケ過ぎと云ふが、假宅だけに取締りも緩く、蚊柱の立つ夕暮頃からも、ちよい／＼立廻はる色男もあるのであらう。

秋の屋 蚊柱が立つ程であるから、餘り賑はしい店ではなくて、間夫の忍び来るには宜いであらう。

省 二 新地の間夫へ、蚊柱は適當な景物だ。

(220) 元服に又改めて言かわし

省 二 幼時の約束—言名附—を元服に際して、改めて繰返し置く。

東 魚 替。改めて言ひかわす處に、情味が溢るる趣がある。秋の屋 親と親との許嫁の中で、元服をしたのは男の方である。

(221) おほねの名に近い子卸

東 魚 子卸は女醫者だから、名も俗ッぼくては、うつらぬので、六ヶ敷名をつける。即、お局の名にでもありさうな名を付けたりするのであらう。

秋の屋 御局といへば、鏡山の岩藤を聯想するが、この子卸しもこはらしい名であらう。

省 二 職業柄に應しい名を選ぶので、子卸でも自らは仁術を行ふ醫者との心構はあらうから、高尚な名の謂であらう。

(222) ゆるひ黒木に箒をさす

省 二 箒の誤字。小原女が黒木の間へ、箒をさし込むで頂いて行く。

東 魚 原本はちやんと箒になつて居る。實際かういふ句の様な事實はあつたであらう。

秋の屋 寫實の句といへるが、「ゆるい」は少し技巧に過るやうである。

(223) 嬰花な腹を醫者は怖かり

東 魚 美食家の飲酒家の贅澤三味な人に對しては、醫者からみれば、あれでは内損ンを起すだらうと、あやぶむ心。

秋の屋 二 「榮花な腹」とは、善く言へたものである。

省 二 「榮耀榮華の餅の皮」で、榮花な腹の持主も多からう

(224) 呼聲を母のにくかる李賣

省 二 夏賣りにくる。賣聲も酸はい。

東 魚 二 李で小供が腹をこはしたのであらう。

秋の屋 二 酸い聲といふことは無からう。前説が穩當であらう

省 二 無論下痢である。私の幼時にはよく賣りにきた。安

すかつたので食べ過ぎたものだ。

(225) うそのない旭を戻る小松原

東 魚 二 小松原は京の小松原ではないか。北野へ一夜參籠して、清淨な心持ちで、小松原へさしかゝるのではないか。甚だ駄勞解である。

秋の屋 二 前解は正確と思はれる。

省 二 自解なし。前解に疑ひを存す。

秋の屋 二 北野の千本松原を、小松原と稱した歟。更に考ふるに、北野の句ではないやうである。

(226) 死は煙てはいるよしはら

省 二 「深くはいれば法の吉原(初篇)と對應して味ひたい燒場の風は吉原へ吹くであらう。

秋の屋 二 實際では淺草田圃の火葬場で、死屍をやく臭氣は、小塚原邊の方が甚しかったと聞いた。

東 魚 二 京傳作「志羅川夜船」の中に、素見の通がつた二人連れの會話に「何だかおかしな匂ひがするねへ、ムン又小つか原でやくそうだ、鼻へせんをかわつせへ、此の匂ひかすると爰は降

りたがるよ。」と云ふ一節がある。さうすると燒場は小塚原にあつて、その匂ひが吉原方面へ風向きで來るのであらう。

(227) 誰植て人に淋しき峰の松

省 二 ひと旅で、峰の松を眺めた時などは、殊に淋しい感がある。誰が植えたものなのだらうとの思ひは起り得る。

秋の屋 二 「冬嶺孤松秀」の詩句よりも、大に機巧を弄した句である。

東 魚 二 「人に淋しき」とは、巧みな云ひ廻しと思ふ。

(228) けいせいの親に逢日は雪か降

省 二 劇の一場とも言へる。傾城の身の上に同情され、雪は適切な背景だ。

秋の屋 二 降雪の雪に流連をして、圖らず傾城の親に面會したので、これは晝間の情景である。

東 魚 二 非常に面白い句だ。勤め氣はなれと云ふ色客であらう。「晝の情景」と云ふお説に賛。

(229) 糸遊のたんこに早きうつの山

省 二 「たんこ」は十團子。宇都の谷名物。旅人は茶屋に立寄つて味つたのであらう。(足新翁記)。春の閑かさを思はせる

秋の屋 二 宇都谷十團子は、食ふべきものでは無いと思ふ。「足新翁記」に「毛吹草」を引いて、「くはばやな九ツ時に十團子」といふ句が載せてあれど、其外の記事に據ると、決して食ふ團子ではないやうである。これは糸に貫いて賣るものなればそれに掛けて糸遊を配合したのであらう。

東 魚 二 俳諧辭典には、十團子は小豆大とある。何に據つてさう書かれたかは知らぬ。が藤栗毛に、「降しきる雨やあられの十たんこ、ころけて腰をうつつの山みち」とある感じからも、

小粒らしく思はれる。初めは食ふたかも知れぬが、段々小粒になり、食ふ目的の方も遠ざかつてしまつたものかも知れぬ。丹羽桃丸の旅の袖日記に、「明六時出立して宇津の山にかかる十圍子の五六連、うすくろく店に賣れ残りたるを懸り」とあるから、食ふためのもではなさそうである。尙「十圍子も小粒になりぬ秋の風」許六がある。

省二 此句の出來た時分の十圍子は食べる目的のものでなかつたのが正しい。風俗文選大註解には、旅人が食つて居る繪が載せられ、その圍子は大型に描かる。東海道名所記に樂阿彌作、「小粒なるうつ山への十圍子、しかもかたくて齒にあはぬなり」とある。古川柳に「十圍子詠めぬらすくへもせず」。騷旅漫録には「宇都の山の十圍子は、豆粒ほどの餌を麻糸もて十づつつらぬき、五連を二トかけとする。土人の説に峠の地藏井のたせ給ふ。このほとけの夢想によりて十圍子を製し、小兒に服さしむれば萬病癒といふ。(圍子のかたち數珠に擬するにやその製もまたふとしとある。「圍子から縫ひならはせる宇津の山」。「十圍子買つて旅僧耳へかけ」。「春三月圍子ぬくらむ宇津の山」。「その露の柳にかけよ十圍子」。自然製のもので、黃白赤の色をつけ——今は専ら白色——女が賣つてゐた。それは舊七月廿四日を主とし、地藏尊の緣日に賣る。ふさ十個づつ、五ふさ、串は糸なり。

(230)

寝姿かよくて哀なすまふ取

省二 寝姿のよいやうな相撲取なら、幕内上位の大力士ではなからう——参考句「寝姿の淋しき雨のすまふ艸」(柳蔭)

秋 屋 相撲が漸く老境に入り、身體に衰弱を覺えて、自然寝相がよく成つたのである。

東魚 寝相がよいのが寧ろ哀れに思はれるとであらう軒聲雷の如く、ふんぞり返つて寝る方が強い力士らしい感がされる。

「従つて老境に入るといふ前説の連想も起る。

(231) 放し鳥とまれと思ふ木を過て

省二 放生會の鳥。とんで行くのを見送りつゝ、あの木に一寸とまつたならと思ふのも人情だ。古川柳には「嬉しき木に突當る放鳥」がある。

秋の屋 特異議はない。

東魚 放し鳥をいとしく思ふ心も、かうした場合、自然な人情の發露であらう。

(232) 事納着かへる程の日てはなし

省二 事納事始は十二月及二月八日に行つたのであるが、双方が反對に呼ばれた例もあり、昔は色々議論があつた。遂には兩日とも事納といふやうにもなつたりした。今、二月八日として解するに「事納氣をつけられる新世帯」などでも判る如く、別に着替をする程、改らたまつてかかる日(行事)でもないといふのであらう。

秋の屋 私は前解に反對。すなはち十一月の事納とする。十二月は短日でもあり、實に多忙の時であるから、事納の日だと特に着替る程の事はない、といふのだと思ふ。

東魚 年中行事の一つではあるが、上トを着、客でも招くと云ふやうな、改まつた事はせぬ日と云ふ處に、他の節句などと違ふのを「日ではなし」と穿ち味を持たし詠んでもものであらう。

(233) 朝貞に追立らるゝさしむかい

省二 差向ひでの話が 朝顔が咲いて、其方に移つた、とでも云ふのか。

秋の屋 相思の男女が、一夜を語り明かしたけれども、情話は綿々として盡きず、朝顔の花が咲いても、相對して離れかね

て居る、といふのであらう。

東魚トイお説の如きであらう。

(234) 脊中へしれる猫の腹立

省二トイ古川柳には「起されて猫は脊中へ腹を立」

秋の屋トイ脊と腹、狂句だと排斥する人もあらう。

東魚トイしかし味がある。狂句のだと排斥するのは、作者に氣の毒である。

(235) 雪の日はころけた儘の柶桶

省二トイ墓所入り口の光景。雪の日は墓參者もなく、柶桶は轉

げたまよ。

秋の屋トイ墓地の光景であらう。寺院にて使用する罎伽桶は、

一に柶桶ともいふ。

東魚トイ實景であらう。

(236) 闇のときれるうとん屋の前

省二トイ眞の闇夜ぢや。一軒あるウドン屋丈けは、未だ店をやつて居る。——その灯火は淋しい感のするものである。

秋の屋トイ古驛の荒涼な夜景である。

東魚トイ「闇のとされる」と云ふ所が、奇智的であるが、寫生に即して居るから厭味はない。

(237) 須磨寺に夜着きて寝そ怖き

省二トイ怖しきは淋しい感じが、多分に含まれてゐよう。「夜

着」に特別に意味があるとも思はれぬが、それとも何にか傳説があるにや。(須磨寺附近が非常に淋しい處であつたのは、三十年前の事情を聞いても判る位だ)

秋の屋トイ只淋しいと感じる而已でなく、他に怖るべき理由が

有るのでは無い歟。

東魚トイ「夜着きて」と特に云つたのは、暖い夜着に勿體ない心持ちでねると云ふのか。千鳥の聲が凍るやうな夜を深々と夜着をきるると云ふ心持ちが、判然と分り兼ねる。

(238) 角力とりめと撫る子の尻

省二トイ頭よりお尻を撫でつつ、「角力取め」と云ふ方が、感じが現はし盡される氣がする。

秋の屋トイ自分が孫を抱く時にも、斯る感じが屢々起る。

東魚トイ如何にも丸々と肥つた小供を抱き上げて、目を細くしてゐる有様が想像される。

(239) 母も哀と思ふほと惚

省二トイ生娘の思慕は一圖だ。戀患で絶食——母親は心配もあり、身を切らるゝ感がしよう。

秋の屋トイ惚れたのは娘であらうが、目的の遂げられぬ片思である。

東魚トイ何とか思ひを叶へてやりたいと焦慮する母のさまも、句裏に窺はれる。

(240) 夜かくらやつめつた前へ廻りけり

省二トイ抓つた駄、詰つた駄、後者ならば觀衆の多い光景とはなるが。

秋の屋トイ夜神樂をみてゐる女の股などを、前に居る人が惡戯に抓つたので、それはどんな男であるかと、前の方へ廻つてみる、といふのではないか。

東魚トイ後から前の者の尻でも抓る方が自然らしい。前に知合の女かなどがゐるので、戯れに抓つて驚く處を、前へ廻つて顔を見合せるといふ場合ではないか。(前句に戀のやうな意味で

もあるのではないかと想像する)

(241) 洛外へ出して目にたつ拂物

省二 洛外は京の郊外、拂物は賣拂物。特種なお拂物であらう。(それとも拂者、祇王などの如き)。

秋の屋 公家衆が古物商に賣拂つた、古冠、古沓、などは、殊更に人の目を惹いたであらう。

東魚 場所似合はぬ調度、盗品なら直ぐに足がつくやつたらう。

(242) 若黨をたいなしにする初螢

省二 初螢を捕えてやるため、若侍がたいなしになる。(初螢は技巧)。

秋の屋 若黨が泥まみれとなり、腰元等は痛く氣の毒がる。

東魚 「たいなしにする」で、若黨のキリツとした出立ちでゐた様が想像される。

(243) 死た和尚を譽るとうふ屋

省二 和尚は大の豆腐好であつた。古川柳に「豆腐屋は貧乏寺の時計なり」。

秋の屋 豆腐は漢の淮南王劉安に始まるといふ。僧侶の精進料理には、豆腐が第一であるから、寺の和尚は不斷の顧客である。

東魚 後住はまだ若いのももしれぬ。ユーモアある句だ。

(244) 楓てはたく梶の葉の虫

省二 七夕のお手習。

秋の屋 お手習は如何。梶の葉に歌を書いて、星に捧げるのである。

東魚 梶の葉でハタ／＼と楓を打つて、葉の虫を打落すといふ細かい觀察。

省二 星祭するのです。「まね事も梶の七葉や手習ふ」(眞佐)

(245) 直切ころして歩行順禮

省二 順禮なら懐ろは貧しい筈、何んでも値切るのは當然。

秋の屋 別に異議が無い。

東魚 御報謝を願つて歩くのだから、値切る位は當り前であらう。

(246) 葉櫻に成つて氣の減る錢の音

省二 氣の減るは心細くなる事。遣ひ果して感興薄だ。

秋の屋 財布が軽くなつて、小錢の音ばかりでは、心細くなるであらう。

東魚 自ら苦笑したやうな心持ちが思はれる。

(247) 指櫛か纏に懸て人たかり

省二 纏は他活字本に「網」となつて居る。挿櫛が又手網に懸つてきた、自殺者があつたのであらうと人だかり。又手の字が示す如く、竹を三角にして前方を網の囊としたもの、節用集に「指櫛」一尚は、纏は頭髮を包むきれをも稱するが、それが櫛にかかり人にみて貰ふのか。イヤ夫れでは「人だかり」が大ガサとなる。

秋の屋 纏は「さで」と訓み、小手網のことで、句意は前解の前説の如くであつて、「四谷怪談」の隠亡堀のやうな場面である。

東魚 ケイに「鮎波の纏でをしゆる法輪寺」がある。俳字節用には纏網としてサデの振假名字字である。尚 纏、趕網、小

網・狹網とある。合類節用にも纏網、サテと訓じてある。漁具
文選註。形如箕狹後廣前と註してある。

(248) 馳走に竿を添る柿の木

省二 面白し。拙家も此式だが、案外澤山はとれぬもの
尤も澁柿だからネ。

秋の屋 面白い句ではあるが、情趣に乏しいと思ふ。

東魚 ある時俳人蘇子翁の邸で句會が催された。庭は非常に
廣く柿も澤山熟してゐた、主人公は竿でそれを落したりして、
れた。其時の私の句に「袴着て柿もぐ柿の主人かな」と云ふの
がある。此句に思合せて自分には大變興深く思はれる。

(249) 夜着の日陰に白の目を切

省二 夜着が竿に干してある日陰に、うづくまつて石白の目
を切る。みつけどころ。

秋の屋 前解の如くであらうが、特に夜着を持つて來た、作
者の意が判明しない。

東魚 何となしに小春時の氣がされて、夜着が干されてある
事も適はしい感がある。(尙理窟めくが、夜着なら風に煽られ
る事もないから、日蔭が安定な釋である。襦袢や浴衣だと風に
でも煽られて、其度に日がさしたりされると、チラついて白の
目などは切り憎からふと云ふ實際に即した處があると思ふ)

(250) いらたかを投ればしはし湯氣が立

省二 いらたかは數珠の一種で、修驗者などは用ひた。祈の
殺氣立つて居る有様。

秋の屋 修驗者などが物の怪を祈る時に、珠數を投げつる事
がある。「湯氣が立」は、祈る人の頭から、湯氣を立るのでは
ない歟。

東魚 前説の如く解すべきであらうが、凄しい場面に對して
「湯氣が立」は可笑味を覺えて、其場合の氣分を損ふやうに思
ふ。

(251) 段々に音のなくなる ところゝ汁

省二 ところろ汁を食べる者の經驗し得る作。

秋の屋 「音のなくなる」といふのも、少し拙いと思ふ。

東魚 汁を吸ふ音でなく、摺鉢でする時であらう。ところろ汁
が出来上りに近く、段々音がしなくなるのである。面白い輕味
の句と思ふ。

省二 「段々」とあるから摺る方が適解。

(252) みとり子に膳をとられて茶漬くふ

省二 膳のものを欲しがつて泣く。泣きやませる爲めに膳を
與える。(必ずしも泣くと限る要はないが。「茶漬くふ」は雰
圍氣を描寫し盡し得て妙。

秋の屋 嬰兒が膳の上の器物を搔廻すので、それを爲す儘に
して措いて、親が飯をくふといふのであらう。

東魚 丁度晚酌のすんだ、もう飯にしやうといふ頃合ひが想
像される。

(253) 竹植る日を主の聞捨

省二 五月十三日を竹酔日と稱し、この日竹を植ゆれば必ず
活くと。下七は前句により適切に判明しようが、以て句の餘情
をつなぐ。

秋の屋 この短句のみでは、その意が判明しない。

東魚 ものうげにしてゐた主人、今にも雨のきそうな陰氣な
日でもあらうか。



川柳塔

路郎選

山本丹路

内縁といふさびしさの産褥に
ピルの窓もの憂き好色談に暮れ
偉人のことなど心足りし日は
教育のひとつに巡查教習所
ものの情性を知りそめし朝
反抗をするすべもなし帯をとき
いやになる程生活のくだを巻き
ふるさとをにくむ娼婦のしろい息
内閣の責任にして腰をあげ
淫賣婦くには信濃の雪深き
電燈をおろし内職にはあらず
惚れるてふ言葉よろしきあきの酒
あんまりな嘘がくやしいほどきもの

外交員太い万年筆を出し
隣の犬が盗られた話朝の膳
黒檀の机をひとつあてがはれ
人妻のあはれは酒にむせかへり
わが手枕に人妻を戀ひ
慌て者のたとへの中へ顔を出し
轉向の日記インクの色をかへ
老人に言はぬ先からうなづかれ
人生のエアーパーケットへ簀り込み
引越して海の遠さを屋根から見
浸水のモーター河馬に似て非なる
晴れた洋室に熱帯魚と妖婦
住田亂耽

阿部閑生

筆でくふあるじの愛す熱帯魚
熱帯魚値段をきけばもらひもの
鬮魚飼ひ馴れて虚榮の強い主婦

劍光の一閃消えしまゝの闇
劍氏を悼む(二句)

醉ふ術を知らない男あくびする

生田翠夢

人生をうとんじそめた戀心
九月三十日裕を持つて逢ひに来る
曼珠沙華女の死をば聞かされる
女まだ戀の講義をきゝたがり

西田艸樂

妻の實母永眠

今は早や只いゝとこへ行きなさい

學校倒壊

梁の下に幼き命覺悟して
自然美へ女を容るゝ餘地がなし

橋本綠雨

避難民家財なんぞはいらぬ也
街路樹みな吹き倒し空高し

山月、鶴峰君の昇進を祝す

階級へまつすぐに行け澄める秋

中澤濁水

書いてくる妻さ座談のしとやかさ
勝たむ氣も劣りたい氣もなく暮し
嫁く家にも家の秘密があるんだぞ
遮断機へしんがりの首はるかなり
話してゐるそばで友達たゞ儲け
演迄は蚤も簀着るなどと病み
教へ兒の女將あまへて酔はすなり
墓掃除毎に鋪装をする氣なり
來るわく／＼さて辯護士の合はない日
爆笑の御飯むすめの指を飛び
鮮かに逃ぐる言葉に學ばされ

大鶴喜由

もとポリスさゝいの言葉尻をとり
小僧の尻ベタルにおどり天高し
名ばかりを願ひ生活難にゐる
齒の格好まで横着に出來てゐる

風水害に寄す

いつてまゐりますそれきりの吾子なりし
引き出して泥を拭えば人の子だ
妻は乳房われは臍まで水をうけ
龍神のおやまの夢に迫る水
拘引をされるあまたの紀の國屋
浸水だ平家だ無産階級だ

須崎 豆秋

ゑらい人の朝日一本だけもらひ
道頓堀双子が笑ひながら行く
二人とも眼鏡外づしてお味噌汁

風水害(六句)

大風を刑務所だけが知らなんだ
大毎も止まり、豆腐屋も止まり
遭難へ貯金の尻が五十銭
お見舞に行けば屋根から聲がする
ローソクで馬鹿なお客へ酌いでやり
さるほどに高利貸からピラが来る

姫田 夕鐘

風水害

水は減るへる慾をとり戻し

糸たれて太平洋のこゝろかも

父の初盆

母さんは次の線香へ灯をともし
きついトリツクで女を圍ひたり
姉藝妓處女を崩しにかゝるなり
熱を押さへて集金に行くなり
あれから苦勞しとるんだつせ褌子の袴

喜多 春秋

人間と思はれてゐる邪魔くささ
日曜日來た魚屋を夫婦で見
横に説き縦に説き明日を知らず

人の死

やがて皆散る花ながら先へ散り
困つて居らねば受取らぬ金
猿の顔子猿のくせに老けてゐる
大きな名露地の國際何んとか社

吉田 水車

味覺の秋ヘライスカレーはわびしいよ
掃き寄せるやうに藝妓の裾さばき
大風をしほに朝顔しまつされ

衣更へ女車掌の秋かるし

鮎風 禍(三句)

掘り出すカバンの主の見當らす
吹きぬけし家根を名月もるゝなり
街の時計七時五十分のまゝ止り

水谷 鮎美

頁繰る指はすなほに秋のなか

大颯風水害(九月廿一日)

濁流へろうそくの灯の片ちびり

浸水の庭に鱒が泳ぐなり

新木のかほり童心となる釘をうつ

柳友の見舞はがきに蚊がとまり

人の呼吸を剃らねばならぬなり

平井興三郎

本名を呼んで女給を嫌がらせ

藝者から女給になつた襟を掛け

おくさんと女給言われて洗面器

暴利取締令

蠟燭で儲けた位ヶチなこと

救恤品後の男の手が長し

親友の情はランプが届いて來

大阪風水害 平井 春光

疊屋の曰くうちのも濡れました

義捐金うひへは幾何當るか

襷掛け涙ほど出る水を待ち

泣面へ今夜警備をたのみます

遭難談すこし誇張がしたくなり

石丸 晴朗

一番の看板娘肺を病み

雁北へく繪にあるような月

折り入つて頼む首筋長かりし

出帆の汽笛に時の分るとこ

名月の眞下石僕と僕の影

後藤 青兒

溝曳を地下鐵の風知つて居る

不平があつて地下鐵で行く

偉らさうにして居た人が逃げまどひ

生命もわかぬにトタン盗み去る

讚美歌は死の直前の清きもの

石曾根民郎

暗黒化こゝろの灯などともらせむ
ひとしでれリキシヤの幌に聴くとなく
まともには見すかくれては惚れたがり
ふりかへるおんなごころとへだたつた
注文を漁りに下駄を履きかへる
尼 緑 之 助

放屁したりなど父子黙々とゐる
隣は朝から悪口 僕は齒を磨き

豪 雨

水 真 直 に 座敷を 通り 抜け

大阪地方颱風禍

試練などゝは遠くから言ふ言葉

西村 明珠

能率が悪いといふて酒をのみ

貧乏が貧乏へ嫁き笑ひ合ひ

二尺ざし舊家と見えて日がおぼろ

木綿着の肩凝る暇もなかりけり

渡邊 曉 童

尾 道

かわりなきものにくるわの灯の色よ

甥や姪のサクラオンドをきかされる

曼珠沙華きしやにちゆういとかいてある

親としてひいきなどはきゝぐるし

毛利 九波

タイピスト、キイの如くに歸るかな

工場のベルトに育ち詩を愛し

人間として蒼空を讚ふかな

雑踏を振返らせて京言葉

市場 没食子

映畫そのまゝで嵐を突走り

救護班出動

廢休をして働ける身は嬉し

公平な立場に閱がるのかい

西 いわを

就職に女らしさもあつてよし

日 野 革 水

末席を汚していやな奴に會ひ

學問をして凡人の域に居る

本箱の出し易いとこへ育兒法

長男出生

難産へ柱時計はゆるう打ち
おしつこをさした手で引く設計圖

命名

命名に我父として慈父として

越智 虹子

淋しさに芒のそよぐところまで

女事務横を向いたら男の眼

鋪道の點景にポストの色が赤だつた

岩崎 柳路

未亡人マカロニの様な戀をする

子を連れて入道雲へ唄うなり

モヒ患へ惜しい女と巡查言ひ

東谷 開路

あなたですかと職業紹介所

颯風一過

義捐金貰う大大阪となり

互は家主のもの無事でゐる

丘 遊舟

戀文の局印までをなつかしむ

獸になりたし戀の幻や

まぼろしは君が愁ひの姿のみ

朝田新水

人好きがするの夫妻の社交術
表情もなく即賣の前に立ち

町田承春

最敬禮神の心をふと感じ

哀れさは壁にも似たる皮膚の色

竹内機見女

明月へ今年夫をもつた顔

慘土に秋雨しきり

案内の子の足わびし泥の道

荒井英賀夫

大阪の兄孝行を金でする

洗ふ役張る役障子の多い家

江戸みつる

他人から見る駐在員は美まれ

死神に見はなされたり戀ざんげ

植山九天

友の病氣

秋彼岸見舞へば經の聲がする

もらい水妻のエブロンぬれたまゝ

村松夢裡

純情にほだされ商賣負けとなり

九月廿一日

残された體へ寒い秋の風

妹尾 變人

春や春戀も賣りますガソリン屋
ほゝ笑みが見える遠さになりけり

奥野 禿山

學校へ死に行けとは言はなんだ
婚禮費貯めに來たのがはぐれ出し

松下 小柳子

慾すてた姿に病ひ逃げたるか
獨り者もいつしよにさわぐ水害地

宮岡 白峯

寝ころんで人夫の影が見えるなり
警察の壁も風水害の色

三鴨 美笑

限りなき苦勞のなかに子は育ち

妻を迎へて

戀愛は皆んな清算して見た氣

粒々集

松山 前田 五健

繪姿になつて女の疲れ様
侮つた雲へ釣舟それ見たか
名所圖繪こゝらは雲でボカしとき
得意泰然心臓が知つてゐる
上陸の水兵さんに柿は熟れ
測候所云ふ事聞かぬ雲に過ひ
癩癩のあとの空虚を寝ころびぬ
名月へ三味線を出すくらし向き

御影 長崎 柳秀

眞しんで書くも處世の一つなり
西陽さす暖簾をくゞる金盥
青春を思ひ出したる出されたり
出張をかさかけて云ふ年の暮れ
人間の智慧をあざける風が吹き
往診のあとは夫婦の顔がより
生命さへあれば誤診であるもよし
居眠をする復習へ風邪を云ひ
帯といて女房疲れた座りやう
禪がけものくして二反張り



川柳二十日會にはさだでも
 再席出来ませぬ、毎月五日の
 午後から夜にかけて不特酒一
 南濱廣玉高麗酒三丁キング製
 茶店にて路馬主幹を中心に賭
 る會です、會費の定めはあり
 ませぬ。

▼案内の、ガキ一枚出さぬのに二十日會はソートーナものです早くもその第四回目が十月に開かれた。▼集る時間がきめてないので、遅刻して濟まないといふ顔をする必要もない。▼私は晝が来たら顔をさらすことにしてゐる。誰がトツアを切つて来るかが一寸楽しみだ。▼新水クンが洋服姿でやつて来た。今夜は商用で人を招くことになつてゐるのださうな。それは晝席の露拂ひに来たとは、この眞打をかゝ義理がたい。新水がシンズキ(浸水)で大きな損をした話を一トくさり、なんでも同クンの事業の麻繩をやらせてゐる家が、みんなシンズキしたんださうな。幾萬の資産を失つた新水クンはそれでも社中の罹災者

の中には這入つてゐない。屋根の修繕に五百圓バカシ要りましてと云ふ元氣まで復興をいそいでゐる。▼次に山雨樓クンが例によつて例の如く制服で、澤山印刷物を抱えてやつて来た。社中罹災者に關する挨拶状やら、禮状やら、饌金の報告書やらいゝゝな印刷物だ。それではこゝろでみんなつて發送しようとして云うことになつて、川柳二十日會が労働二十日會に一變した。▼そんなこととは露知らずの口で豆秋クンが来る。▼聞路君クンが来る。▼僕が印刷物の宛名を書くときみなして、たむ、封筒へ入れる、パタ、パタ、パタで三四時間は事務員化する。▼漸く片づいたとこへ史呂クンが這入つて来た。▼再び山雨樓ク

ンがそれを抱えて出て行つた。▼やがて電燈が點く。居残り組は豆秋クンと史呂クンだ。▼禿山クン、里十九クン、紳樂クン、丹路クン等が次ぎ／＼に登場した。里十九クンの聲が部屋一パイに擴がつかと思へば、職業的經驗談である。ソレを得意の漫談で押し切る。それから金を落した話、金を拾つた話で、又一トしきり花が咲く。▼叱られるかも知れないが、ホンの少しばかし、その内容を素ッ破抜くと、財布を落して首按摩に拾はれ、その家が判つたので菓子折と包み金を持參に及ぶと、ナンホおますと聞くらんやから、○圓だすと云つたら、それでは多う過ぎます、×圓でよろしい、親方が一割は貰へと云ひましたからと云つて受取らない。それで一旦出したものを、へ左様かと持つて歸られへんがと、このとこ里十九クンの獨壇上である。▼ベンチに腰かけてゐて同時に二人で暮口を發見したのは眼の大きな里十九親分と、頭髪をモツ／＼のばした眼付き

の悪いルンバンクンだつたが、こつちは金に困つてエヘんので、讓つてやつたら、何運も禮を云つて去つてしまつた。そのあとへ、キョト／＼した髭の紳士が来て、三六圓這入つてゐると聞いてエライことをしたと思つた紳士は直ぐあとを追つて行つたが駄目だつたらしい。この暮口を同時に發見した時の眼付と身振りの一人二役は全く曾我廻家もので廿日會に何故入場券を賣らなかつたかと金に縁の無い僕をあはれんだ。▼まだある、金を掬られて困つてゐた娘さんに岸和田までの切符を買つてやり、阪神から難波まで送つてやつた話、これなどは昔なら、娘が戀病ひして養子に来てくれとせがまれさうな話だが、惜しいことは時代が違ふ。詳しいことは里十九クン傳でも書く機会に譲らねば第一原稿料にならぬ。▼又僕が記事係にされてしまつた。別に頼まれもせぬのに御苦勞な話だ。幹事の無い會だけに不平を持つて行くところがない。この次は茂乃に書かせてやらう。(不朽洞主人)



橋本雨後氏の繼たい

新總務 山本雨迷氏

「事務所移轉」の事ども

麻生路郎

◆十月の十五日の朝、私は縁雨君から川柳雜誌社の事務所を引取つてくれとの信書に接した。その理由としては昨年の病氣が再發したので、とても今まで通りの面倒が見られないからとのことだつた。尤もそれがために同人を辭める譯ではないが、大分疲れてもゐるのでよろしくとのことだつた。私は事務所のことよりも病氣再發の方を案じて、早速見舞に出かけた。ところが病氣の方は昨年手術したところが炎症を起したのであつて發熱さへしなければ大したことはありませんとのことだつた。

◆しかし私はこの際事務所を引取つて同君を休養させることを決定した。この春、愛妻を喪つて精神上大きな打撃をうけながらも引續いて今日まで社務の遲滞を來たさせずに、努力してくれただけ、それだけに疲勞を感じてゐることは事實である。これ以上押しつけることは情に於て忍びない。假令事務所がどうならうともそれは致し方がない。さう思つて自分は事務所は何んとかするから、この際徹底的に健康の快復をはかつてくれるやう話して歸つた。

風水害 醜金御禮

這般の風水害に對し 御見舞金を醸出して下さいました社關係の人々並びに 特に社外有志諸賢へ御厚情の程厚く御禮申上げます。

昭和九年十月

川柳雜誌社

醜金芳名錄

(敬稱省略)
(敬稱省略)

- 參拾口 阪大川柳會
- 四拾口 故橋本外喜(追悼句會費醜金餘金)
- 六口 京城四温吟社
- 參口 竹内機見女
- 四口 山本丹路
- 四口 吉田水車
- 四口 奥野禿山
- 四口 麻生路郎
- 四口 西村明珠
- 四口 眞田幸捐
- 四口 平岩司郎
- 四口 東谷間路
- 拾口 長谷川一徹
- 貳口 福田山雨樓
- 六口 森東魚
- 壹口 北川あや美
- 四口 橋本縁雨
- 六口 大西長三郎
- 五口 清水友帆
- 貳口 永田里十九
- 四口 西島〇丸
- 四口 明石柳次
- 四口 西田艸樂
- 貳口 朝田新水
- 六口 川上三太郎
- 四口 毛利九波
- 四口 日野華水
- 四口 高橋かほる
- 貳口 庄万よし
- 拾口 谷脇素文
- 貳口 後藤青兒
- 參口 畔柳社
- 貳口 生田翠夢
- 貳口 淺田一

◆それから四五日の間は事務所の移轉問題に就て奔命した。そして同人増位汀柳君、山本雨迷君、客員鳥山一步君等の犠牲的提案によつて事務所を天王寺區上汐町一丁目に移すことが出来る運びとなつた。私は二十二日の夜急遽同人會を開いてこの事を報告した。同人諸君が社の將來を思ふて欣喜したことは同夜の西田艸樂君の挨拶によつてもうなづけた。

◆そして、事務所移轉に先だつて同人増位汀柳、山本雨迷の兩君が編輯局同人となり、雨迷君は綠雨君の後を繼いで總務の椅子に就くことになつた。斯くして綠雨君は總務待遇として少しく樂な方面を擔當することになつた。

◆汀柳、雨迷の兩君が編輯同人となつたために、勢ひ山本君の主宰してゐた柳誌「玉むし」は十一月號(八一冊)を以て敢然として終刊號を出すことになつた。遂に來る所まで來たのだ。すべてを路郎のためにといふ短い言葉の中に殘して——同君等は川柳たまむし吟社を解社した。私が感激したことは云ふまでもない。

◆舊事務所は少しく片寄り過ぎてはゐたが綠雨君の不斷の努力がそれを補つて餘りあつたので社務の進行は遲滞なく行はれてゐた。開け放された二階からは郊外にゐるやうな新鮮な空氣が流動してゐたし、編輯の途中に、内湯に浸つたり、すき焼で一盃傾けたりしたものだ。冬の夜の編輯の時などは頗も向けられぬ風をまともになうけて戻つたことなどが次々に思ひ出されて今更のやうに名残が惜しまれる。

◆上汐町の新事務所は堂々たる洋館であり、その階上の洋室が、編輯室と柳談室とに區劃され、圍碁、將棋、卓球、蓄音器、ラヂオの娛樂機具まで備付けてあるので宛然川柳會館川柳俱樂部の觀がある。屋上の露臺からは眼下に道頓堀歡樂街の灯が星のやうに輝いてゐるので川柳から——紅茶の夜へ歩を運ぶのにもさう遠くは無いところにある。

◆私も、この際一層の發展を期するために、新事務所へは毎日のやうに、出かける積りである。同人諸君もせいふお出掛けが願ひたい。はや一部では同人出社簿説さへ生れてゐる位であるから今後の賑やかさが思ひやられる。

貳口 岩崎 柳路 貳口 中島 鐵洲
六口 増位 汀柳 六口 大島 瀧明
貳口 須崎 豆秋 貳口 福田 鶴峯
貳口 首藤 竹楓 參口 竹原 支部
尙締切後に左の方々より御見舞金が届きました。厚く御禮申上げます。

拾口 龜井 辰修 貳口 尼 綠之助
貳口 西村 山月 貳口 宮内 耕郎
釀金總口數 貳百四拾九口

▲御釀金は雜費を差引いた上 左の方々にお見舞金として贈呈いたしました。

柴谷宰二郎、池澤樂居、平井春光、平井與三郎、住田亂耽、關本雅幽、水谷鮎美、村松夢裡、姫田夕鐘、宮岡白峯、松下小柳子、荒井英賀夫

尙、東京の前田雀郎、大野琴莊、武田玄六、竹田花川洞、高島玉兔朗の諸氏連名で、左記の人々に風水害の御見舞品として、復興を意味した達磨の玩具の御寄贈がありました。御好意を深謝いたします。

路郎、葎乃、翠夢、春秋 艸樂 丹路、
綠雨、萬よし、新水、機見女、山雨樓、
雨迷、閑生、素人、汀柳、紀太、柳秀、
豆秋、南北 かほる、鶴峰、東魚、明珠
琴人、亂耽



「木枯や」の氣持ちに浸れ

大 窪 文 芳

川柳忌に就て、名稱と忌日とを統一したいと一部で叫ばれて居るが、もつと慎重に研究したい事がある。名稱を初代川柳忌と斷らなくとも、單に川柳忌でも柳翁忌でも決して差支えないと思ふ。單に川柳忌と稱するもその日に集る者は、二代三代の川柳を追慕して寄るものではなく、今日吾等の川柳の開祖たる初代柄井川柳を慕つて寄り來るのである。斯様な形式論よりも祖翁に對する眞の特別な敬慕の念を拂ふにはもつと他に尊重すべき事がある。

柳翁が歿せられたのは、寛政二年九月二十三日で此九月二十三日は太陽曆を布く以前の月日で今日では舊曆である。今年は十月三十日が舊曆の九月二十三日に相當して居る。

現在全柳壇が忌日と定めて居る九月二十三日では、漸く暑さを脱してまた初秋と呼ぶには聊か躊躇せざる得ん頃で、ま

だ身には大部分夏の物をまとひ居り、扇子さえ欲しい候であつて、辭世句の「木枯やあとで芽を吹け川柳」の「木枯や」の翁の臨終の時の氣持ちに大變な矛盾がある。

特別な敬慕の念を拂ふ點は、翁の歿せられた實際の當り月日こそ大切だと思ふそれで現在の九月二十三日を一ヶ月繰延べて十月二十三日と改めると、舊曆の九月二十三日が現行曆に略ぼ毎年接近して居つて、臨終の氣候に浸り得る譯である。假に子規忌を糸瓜忌と稱して居る事は申すまでもなく、此子規忌を臨終せられた九月十九日より一ヶ月前に執り行ふとすると、まだ酷暑の頃であり、子規の辭世句「啖一斗糸瓜の水も間に合はず」その切那の氣感を掴み得ず變なものである。

糸瓜忌と言へば季節の環境が想起される如く、「木枯や」と誦すれば季節の環境が潏然と眼前に髣髴として來る。之れ

Nishincho MEMO

同人と支部幹事

▼朝田新水君は家事の都合で理事同人から評議員(同人)に變更されました。

▼釜ヶ池支部の幹事三谷梨風君が都合により幹事を辭退されたので、再び龜井愚齋君が幹事となりました。

▼西村山月、福田鶴峰の兩君は十月六日付で大阪市書紀に昇進されました。

▼大鐵局支部(畔柳社)が十月十三日湊町から住吉迄市内吟行をされ、キング喫店で句蕪を開かれ寄書を送つて來られました。路郎先生、山雨樓某人、九天、秀太天八、ひかる、與三郎、明坊、木履、水客。

▼増位汀柳君の母堂御病臥中の處十月六日永眠され、八日阿部野新齋場で佛式に依つて葬儀を営まれた謹んで、哀悼の意を表します。

▼岩崎柳路君から熱河地方の風俗寫真十五枚を送つて來られましたので、十月の廿日會出席者に分配しました。同君の厚意を感謝します。

等から言つても翁の辭世句の氣持ちに浸たり得る頃の、十月二十三日を回忌日と變更して全國的に營みたいものである。

「木枯やあとで芽を吹け川柳」と翁が最後の日に嘆詠せられた、百四十五年前の九月二十三日は、晝であつたか夜であつたか、翁は吾が命も之れまでなりと將に終らんとする時に臨んだ此日、最も激しき木枯が翁の耳を微めた、その時の瞬間翁の胸に思つた事は過去を顧み、我亡き未來を考えた、自分が自分の道にいそしんで五十年を歩んで来た道から、今日の木枯吹く淋しい日に吹きまくられたが如く死んで行く、若柳から青柳にそれから相當年數を経て来た柳が……自己……木嵐に吹き荒されて散つて行く、之れまでを翁は「木枯や」と悲嘆したが、自らを慰め又殘る弟子達を勵ますため、思ひは後願



宿り蟹の墓

西田 艸 樂

造物主の神様も、人間の自由意志の存する處如何とも致し方なく、素性のいゝ

の事に及び自分は死んで行くとも柳は風に通つて葉は散らされ、枯れた如く一時は淋しくなるが、吾が意志を繼ぎ必ず忘れぬ様に辛棒して居れば、春は回り来るから手段を講じやうと翁は續けて思つた事を「あとで」に意味を含ませて表現するまでは翁の氣持ちは暗かつたが、猶も續けて春が来たらずを吹く、芽を吹いたら一層守り立て、盛んにせよ、吾に劣らぬ様に必ず頼むぞよの意を「芽を吹け川柳」と命令的に結んで安らかに永久眠りに就かれたのでないかと思ふ。斯く追憶して見ると、どうしても現在の忌日は無理が大にある。第一精神的に忌日を更め之れが完成したら統一を叫ぶべきだと思ふ。又忌日の名稱は「木枯忌」と呼んでもよし此方が却てみやびやかに思はれる。

(昭和九・一〇・一〇稿)

麥と黒穂とを一緒にお育てになる。自らの子供でも、「俺れに似よ俺れに似るな

▼渡邊曉童君は帝釋峽を遊覽されました。「釣橋は女が通る丈にゆれ」曉童

▼本社の主催で十月十七日吟行(松茸狩)を催すことになってゐましたが、當日雨天のため中止致しました。

▼増位汀柳君は大阪朝報で花柳川柳百人集の編輯され好評を博してゐられます。

賛助員と客員

▼前田五健氏は十六日夜廣島放送局から、「松山の夕」の解説者となつて放送されました。

▼蛭子省二氏はお苦しい中から病状を知らして下さいました。一日も早く御快癒を祈ります。

誌友その他

▼青木史呂君は十月十三日八瀬大原方面へ遊ばれました。

▼杉浦醉年君(石川縣)から大聖寺町の柳界では、會報の發行の話も出たそうだが水害その他の事情で立消えになり、僅かに七八名の川柳家が精進を續けてゐるとのお便りがありました。

▼時報柳壇句集(四六判卅頁)が今治時報社から十一月一日刊行されます。希望者には無代送呈の由。申込所は今治市本町一丁目清水方武田樂陽宛

▼きやり吟社では従來の制度を廢して、村

と子を思ひ(路郎)つゝも、子の向つて行く方向には豫断を許さぬ。

手鹽にかけて育て上げて、親の願ひと違つた人間になり行く事、或る程度約束事であり、たまさか思はぬ美點が備はつてゐたとて親の誇りとするは早計である。

十四にもなり、中學の門に入つても、長男にして末子たる彼のあまりにも子供らしい仕ぐさや天性の動物好なる事が、植物好の父と先づ方向を異にし吾が業務を無事に繼いで呉れるか否やなどは全く遠い的を狙ふ心持である。

好事にまかせて、十坪あまりの夜に集めた彼が小動物はまるでノアの箱船をつくりだ。

祖母にねだつて電氣孵卵の雛三羽を得たのが夏休前、三日で死ぬだらうと、見てゐると土を掘り石を覆して、みづを食はし虫を與へ、小米だ青葉だと二ヶ月の後にはほゞ一人前の白色レグホンに育て上げる。そこいらで糞をするので、皆んなに嫌はれるので、親が手傳つて金網の追ひ込を作つてやる始末だ。

その雛を狙ひに鼬が隣屋敷から、ちよろ／＼侵入するので嚴しい監視であつた

が、もう馴位には怖けぬ雛の成長を見ると、雛の餌をうかゞう鼠が憎らしく、早速捕鼠罠をかけた處、廿日鼠の様な小さなが仲よく二匹連れ立つて鼠網に這入つた。捕へて見ると、そのおどおどした小動物に憐愍の情が出て、大人が殺さうとすると、ちだんだ踏んで拒む。果ては雛の餌を少し宛分て與ふる事だ。これでは何の爲に捕へたか譯が解らぬ。

鼠を捕へて養つて置く位だから、石燈籠の際に一匹の守宮を見つけた彼は、せつせと蠅を捕つて與へ、ペロリと喰ふ守宮を見て悦に入つてゐる。守宮を養つて置く人間もあまりなからう。

自分達が勉強をしたり寝起してゐる室の軒に二匹の足長蜂が巢を營み始めたのが、此の春だつた。危険な虫だが壊してやるのも可愛そうと思つて放任して置いた處、夏の繁殖期を過ぎた此の頃仔が仔を産んで、巢は碁壺位により數十匹が蛸集して、當底手がつけられぬものになつた。

蟻地獄といふ虫がどんなのであるか知らないといふので、一日郊外へ連れ出して、或る寺の軒下を數時間探し廻つたが見つからず、甚だ不満だつた彼は、いつ

田周魚氏を主幹に推され、他は社人とし

て改められました。

▼柳樟寺川柳會では「川柳人」の十一月號を劍花坊追悼號として發行されるそうです。

▼「川柳研究」十月號は劍花坊追悼號として發行されました。

▼劍花坊追悼全國川柳大會が、全國各吟社の主催で十一月十八日正午金地院で開催されることになりました。

▼本社鎌川句會百回記念大會は十一月三日午後一時今市町片岡旅館で開催されます。本社から日野華水君が出席せられる豫定です。

▼川柳へちま會 創立記念大會が十一月三日午後一時愛知縣祖父江町善光寺で開催され、第二会場で川柳作品展覽會も開催されるさうです。

▼おもびで三人集(小冊)鈴木 玉吉 高木 九史 鈴木一吉の三君の句集が發行されました。六〇頁、非賣品。

▼番傘川柳社で十月十日夜共濟會で、劍花坊追悼句會を催される、本社から山雨樓君が出席し「根氣」と題し語られました。

▼ふあうすと社では十月三日 夜協和會館で劍花坊追悼句會を催されました。

▼媛柳川柳會では、十月廿日夜端の坊で而笑子翁七周忌句會を催されました。

何處で捕へて来たか一匹を持ち歸つて、乾いた細砂に放つと、コボコボと尻から滑つて這入るのが非常な興味を覺へさせらる。

金魚池には金魚の他に、自ら漁つて来た鮎を放し、水草を採つて来て隠れ場所を造つてやる。水盤に二匹の錢龜を養つて、龜の甲羅に青い水蘚が生えて來ると養龜になつたと言つてゐる。

何分親類から蛙を貰ふ子供だから、蟹が一匹容器から這ひ出して行方不明になると、祖父迄が手傳つて佛壇を除ける筈を動かして騒ぐ始末、全く他愛ない當百翁を見かける事がある。その當百翁さんが、薬用に玉蜀黍を飲んでゐるが、毎日煎じ粕を捨てる時間を見はからつて稻荷さんの鳩が二三羽必ずやつて來る事も彼の歡心の一つである。

「奥の方に住めば裏から雀が來」(艸樂)この拙吟中の雀も庭に集るノアの一員である。

その他に豚兒克己は犬が一匹欲しくてたまらないのだが、あまりやゝこしいので買ひ與へぬから向ひの伯父の家の犬に學校から歸ると一度相手になる事で漸く

意を抑へてゐる形だ。

こゝに憐れをとゞめたのは、宿り蟹だ一匹では淋しからうと云ふので買ひ足した二匹のうち、命數つきである朝貝殻の中から再び長い脚を伸ばさなくなつた。少年はこれを庭の隅にいと町重に葬る事にした。そのおくつきには青い苔を以つて一面に掩ひ周圍には蜆貝の殻を環垣の様にふせ並べ一本の「宿どり蟹の墓」何年何月何日の墓標が建てられた。小さき靈も迷はず淨土に旅立つたのであらう。せめて僕が死んだ時には、彼がその心ばせだけ保つてゐて呉れたらと思ふ。

路郎主幹の滿洲土産に貰つた、アルコール漬の蠅は彼が大切な標本にしてゐる軒に昆虫網がいつも待機の姿勢で立てかけてあるが、此の後何を持ち込むか不測なので、女どもはあの生物好ではと、そろ／＼顔をしかめてゐるが、まだ／＼やつてゐる事が兒戲を出でず何等の期待になる程の事ではないが、先づ放任してゐる實驗用にモルモットを飼ふかも知れぬと口を迂べらしたら、何時買ふ何時買ふと今だに問ひつゞけてゐる。

庭の蟋蟀を聞きつゝ。

▼万よしブレイカイド 主催の出雲大社行團隊旅行は山陰、山陽方面 水害の爲め延期せられました。

▼松田青風畫伯歓迎會(金澤)の席上から寄書を頂きました。紅の花、うたのかみ、今雨、み子、友路、三々浪、庄之助、花曙、銀波樓、旭紅、緑水、六葉、曉、史郎、自然坊、千紅、静時、白羽の外数名、數名に知人の多いので親しく拜見しました。▼今回本社事務所が別項の通り増位汀柳君方へ移りましたので、本欄も本號を以て打ち切りと致します。

轉 居

- ▼東海川柳社(名古屋市中區矢場町二ノ三)
- ▼鈴木泉福君(東京市本郷區森川町七〇及川方)
- ▼多田玉葉君(大阪市港區 八幡屋一ノ一六九舟山方)
- ▼川柳さやり吟社(東京市豊島區 高田本町二ノ一四六七)
- ▼水谷鮎美君(兵庫縣武庫郡大庄村 西字日開一八一)
- ▼品川陣居君(東京市蒲田區御園町一五四 中野武雄)

前月の正誤

- (五九頁) 綱引に一人が笑つてごつと負け
- 葉魚(同頁) 戀人に會へる處へ焼けて行き
- 白峯(六〇頁) 綱引で何人か試される
- (七一頁) カフェーの燈火管制は粹なことトミナ

日 本 名 所

漁船が歸り堺の夜が明ける
大寺餅さげて蘇鐵も見話
人氣者一堺漁人出たところ
酔ふた妓の大寺餅を提げてやり
御家賃が安いと堺から通ひ
充血のひとみ夜市の蛸を提げ
堺の灯相場欄まで眼をとほし
大濱の戻りの折の軽ること



大阪の巻 (六十) 堺

麻生路郎 西長三 大西長三 選郎 畫
いわを 彩泡 同秋 青兒 雨少 鮎美 豆秋

飛 燕 往 來

▼宮尾しゆき君 東京より
川柳雜誌十月號ありがとう存じます、貸倉へおいでになつたあとへ我々いつてお會ひ出来ず残念でした、きやりの展らん會へあなたと女史の百人一句の凸版へ石膏を入れ額をつけ出品しましたが、終つたので送らうと思ひますが途中こわれる心配あり、こんど行くときもつてゆきませう、でも誰がおついでがあつたら取りにきて下さいませ。(路平宛)

▼經子省二君 朝鮮より

謹啓貴十月號により愈々御活躍の様子を知り喜んでます。澤田さんからも時々噂は聞くが、私川柳忌の畫過ぎから容態激變、注射をうけ就寢したまへ、今に及んでます。段々峠を下りつゝ、あり今後の降雨、冷氣でアリ返すや否や専ら牀上安靜、動くも發作を誘導する。衰弱しきつて俊寛よろしくの頃、京城の正木土左衛門君が官用で來光、訪問してくれました。初對面、君は同君と御親交の御様子、私の病氣を弘法の加持祈禱で治すといふので親切にも袈裟を着て、色々ありました。川柳談は殆んどなし、私も談話をするに苦しいのですから以上。路平宛

▲中島鐵洲君 鳥取より

其後御變りはありませんか。目下開催中の商工省輸出工藝展覽會に木目を現せる切子型莖セツト(漆器)廻る灰皿(金屬)右二點出品いたしました處(内報は去る九日)にあつたのですが、目錄が本日到着しました二點共獲狀で貰は初めの参加ですが、入選率も入賞率も第五位で漆器の入賞率は第一位でした。指導者も喜んでゐます。

大阪では十一月に開催されると思ひます。工藝にも川柳と同じで、ユーモアも必要とされてゐます。莖セツト等には特にさうださうです、技工は二でも着想です、共

名物川柳

塚驛寂しく咲いた月見草
 双物買ふ事を塚へ来て氣付き
 學生角力去年のフアンと又出會ひ
 大濱へ安い避暑だと連れてゆく
 なまぐさい一番電車塚出る
 水族館塚で捕れぬ魚が生き
 一休の逸話乳守も寂れたり
 刑務所の月が動いて顔へ来る
 大阪の煙を塚きたながら
 和蘭の船が来て居た塚です
 大濱の湯でこの女優まだ稼ぎ
 あかつきをゴム靴で乗る塚驛
 母の手を離す大寺餅の茶屋

史呂 いわを 萬よし 奈里 天国 同 没食子 新市街 山雨樓 同 萬よし 雨少 雨少

東京の巻

新年號より發表

第一回の題「二重橋」三句

前田雀郎選
 宮尾しほを畫

メ切 十二月五日
 宛先 本社事務所

通した處があります、川柳に教へられる點が多です。工藝と川柳でなく川柳と工藝此點鳥取の工人中私のみが有する幸福であります。それは私等の工藝は産業的即ち大衆的である點でも。巻蓑を取りよいやうに蓋を上ると底が共に上る、ストロー容器的やうです、但し中途で止まつて圖の様に安定します、私の商賣らしい考へでせう（圖は省く）灰皿は同一の工作です。工藝に川柳を意識して盛るてな事は邪道でせうが創作後一日を鑑賞すると川柳がにじみ出る様な氣がします。今日は水害後初めて晴天です、山の手の小供が風を揚げておました田舎らしい風景です。奥様よろしく。（路那別）

▼宮内耕朗君（合應）より
 拜啓。何時もお便り有難う御座います。外地に居る我々にはお便りが何より楽しいもので御座います。週三回内地便入港の樂いさは御地に居る皆さんには到底解せない事だと思ひます。御地は松茸の香りも豊に、紅葉の美々しさも目前にせまつてある事と思ひますが、當地にては昨今やうやく浴衣を見受けられなくなつた様な仕度です。何と言つても年中緑樹鬱蒼として灰色の憂鬱な空などは見様と言つても見る事の出来ない臺灣ですからそれからでもほい想像がつかれる事と思ひます。先生の御葉書を通り颱風のほとんご（内地を襲ふ）は臺灣附近にその源をなしてゐます、そして颱風がどこかを襲つた時には當地は何時も涼しく凌ぎ長き日を送つてゐます、此度の御地の颱風の時にも、本月初め基隆方面を襲つた颱風の時も（基隆市内浸水二、三尺）最近のマニラを襲つた時にも、だから當地方が凌ぎ真い時には他のいすれかの地方が惱まされてあると思つて差支へないのです。そして臺中方面は全島中にも、地理的にも大變害まれてゐて、被害のある様な事はめつたにありません、その點中部の住民は倖です。この様な點からしても此度の御地の方々を大變御氣の毒に思つてゐます。

路那先生外同人一同の方へ宣敷お傳へ下さい、先生の御健康を祈り上げます。十月廿日。（山雨樓宛）



犬のデツサン

岡田某人

どんな名で呼んでも犬の尾が動き
犬の名のいつとはなしに呼びさめる
三、表 情

言ふことは實によく聞分けるし、こちらが少し不機嫌な時など、上目づかひにちつと顔色を見たりするところ、やくざな人間の子供よりはよつほどましであるましてや、トウタン、ゼンゼなんていふギヤングもどきがないから仕方よいものである。うれしい時、淋しい時、叱られた時など、身體全體殊にも尻尾ではつきり表現する。人間とちがふのは、顔面表情といふ奴がないことだ。が、それでいゝのかも知れない。犬がニヤニヤ笑つたりしたら、それこそ事で、飼ふ氣なんかしないだらう。處が、今年の春、九州の親戚から連れて來てゐた六歳になる女の兒は、何をどう見たのか「おかあちやん（彼女は自分が子に貰はれて來たものだと思ひ込んでゐたらしい）デローが笑ふたよ」と顔に云つたさうであるが、果してどんな顔をしたんだらう。

しよんぼりと犬留守番の顔となり

四、習 性

狎の血が混つてゐるせいか座敷へ上りたがつて仕方がないのだが毛が長いので

一、來 歴

可愛らしい犬の仔を賣つてゐる、値段をきくと、しまひ物だから五十錢だといふ、買ひませうかといふ妻の言葉に賛成して行つてみると、二匹ゐて、眞黒なのはその値でいゝが、この白と黒の斑のは一圓欲しい、といふ。斑の方が氣に入つたが、額に疵のあとのやうなものがあるじやないかといふと、これはちきなほります、がしよがおまへん疵もんやで七十錢にしときまつさ。よろしい、といふので引取つたが、疵あとだと思つたのが腫物だつたりして、一ばい喰はされた形。だが飼ひ馴してみると可愛いものである。狎とセツターの混血。これが去年の三月で、生後四十日位だつたと思ふ。

二、名 前

ありふれたのは嫌だといふので、散々考へた後、岸田國士の戯曲「チロルの秋」から取つて、チロ。どうだ稀しい名前だらうがといふと、妻は、ケツタイな名前だといふ。でも音がいゝし、面白いし洒落てるじやあないか。だつて、そんな妙な名前、人のゐるところでは呼ばれへんわ。そんなら何でもいゝやな。と、やりとりがあつたんだが、結局チロになつてしまつた。時折はチヨロとも呼ぶ。名前のとほりあわてん坊で、うるたへまはる様は實にチロである。ところがこの名、後になつてみると外にもあるし、吉屋信子の小説にも出たりして、別に稀しくも何ともなくなつてしまつた。

座敷中一ぱいに手を散かすのであまり上げられない。綺麗に洗つたあとなど上げてやると、この七十錢の犬、途方もなくよるこんでそこいらを馳けまはつて騒々しいことおびたらしい。そして馳け飽きるか叱られるかすると、手近な座蒲團の上にて心得顔に、デンと坐り込んでしまふ。あらそへないものである。祖先の狎族の座敷生活がはつきりと見えて面白い。しかも庭に下ろしてあつてもきつと何處から、何かを引ずり出して来てその上に坐る。いつかも、妻が、千切つたカレンダーの紙を一枚散らしてゐたら、なんとその上に、得心して安坐してゐたといふから習性といふ奴は恐ろしいものだと思つた。

本能へ犬悔ひのなき鼻を向け

五、夢

かつて、幻想的な小説を企て、「夢を見る犬」といふ傍題を考へたことがあつたが、果して夢を見るものかどうかについてははつきりせず、そのまゝになつてしまつてゐた。ところがこれがチロによつて端なくも立證されたのである。といふのが、ある日不意に、ウフツウフツウフツといふ異様な聲をあげるので、身體

でも悪いせいじないかと思つて覗いてみたところ、まんまるくなつたまゝの姿で盛に身體をヒクつかせて奇聲を發してゐるのである。チロ！と呼ぶとひよいと顔をあげて、睡眠不足のやうな眼つきで脊伸びをして、何も異状がない。その時だけでなしにそれ以來といふものほとんど毎日のやうにあるのである。病氣でせうかと妻は案じてゐるし、僕もさあといつたまゝで何とも判らなかつたのだが、一日、例のウフツウフツが始つたと思ふと次第に高くなつて、お仕舞に實に、はつきりと、ウワウワウ……ワン、ワンワンといつたのである。しかもちやんと眠つてゐる。一體この犬は、滅多に吠えないのだが、それが睡眠状態の中で吠えるといふのは、あきらかに何かを、例へば怪しいものか、うまさうなものを見付けたからに相違ないのである。こゝにおいて僕は、犬も亦夢を見るといふ確證を得て快然としたのである。

犬の夢人間の夢世は師走

六、哲

時折散歩に出るのに連れて行く癖がついてゐるものだから、僕が、何かの用で着物を替へてゐると、さてこそとばかり

縁にかきついて、猛烈に尻尾を振る。連れて行つて入らへるものだと考へてゐるらしいのである。が、結局連れて行つてもらへなかつた時にも、決して悪あがきをしたり、わめき立てたりしない。ども、しよがないといつた風で、元の場所へもどつてうづくまつてしまふ。實に恬然たるものであるし、留守をさせられた後なんかも、僕たちが歸つて來ると、すさまじくよろこぶのである。又、どんなに叱られて、隅つこの方で怖えた風になつてしまつたあとでも、呼ぶとすぐよろこんで來るし、一切のあとくされがない。思だけを感じて、決して恨みは憶えてゐないらしい。人間もこれ位さつぱり出來れば、世の中が限りなく愉しく見えるだらうと思ふ。嘘でこねて、義理で結んだ世間に愛想をつかしかけてゐる僕など、目下盛んに、犬のやうになることを修業してゐる。人間がみんな、犬の状態に逆もどりにすることが、佛教よりもキリスト教よりも、將又マルクスよりも手近ではないかと思ふ。社會の進歩にもなふ機能の分化、分裂、次第にせゝこましくなつて行く世の中よりも、犬の世界の、無禮無作法無爲無欲の方が、どれだけ本當の生き方に近いかわらない。

世の中はなるやうになれ犬ねむる
義理に疲れて犬とほうける

柳味と

俳想

福田山雨樓

「秋風」と云ふ課題を選んだのは、この機会に川柳と俳句の區別を説明して見たいと思つて、斯かる俳句めいた題により作句して貰つた次第である。以下俳句の配列は到着順に依る。

X

○一坪の庭秋風のなつかしさ 天國
俳句集に「コスモスの小家がちなる秋の風」と云ふのがあつたが、如何にも風情のこもつた寂びしさがある。否寂びの心を養つて味はふところ、風情を覺ゆるものがある。「一坪の」句はプロと云ふ境地にあつて、尙幾許かの植物愛を満足せしめやうとする。可憐な心の持主を浮ばしめるが、下五は寧ろ月並的詠嘆に過ぎない。もつと見据えたものを表現してほしい。

○家出した娘と知らず秋の風 美津女
所謂皮肉味を扱つた、川柳らしい着想の句であるが、遺憾乍ら陳腐である。川柳に事件の構想が織込まれるのは結構だが、この弊に陥らぬ様心すべきである。

○病み上り抜け毛が惜し秋の風 白英
上五と下五へ名詞をもつて来たことが、この句の味を損れてゐるのみならず、着想に新味がなく、作爲が見えすいてゐる。

○電柱へ秋風が吹く待ちぼうけ 久米雄
待ちぼうけの氣分を表をす爲めに、無表情の電柱を見つけたことはいゝが、中七を「秋風さらり」とか「秋風觸はる」にしたたい。

○倦怠期なごと秋風吹かして 世間音
秋風と云ふ題に厭氣がさす意味の秋風を詠ふことは差支ないが、斯う云ふ敘法は一步誤ると狂句に陥ることを用ひせればならぬ。

○秋風へぬけ毛が就立つか 子洋
素直な詠み方であり、切實な感じを出さうとした點は受取れるが、句の燃焼が足りない。「秋風へぬけ毛の櫛をちつと見る」としてはごうか。

○秋風へノーネクタイが淋しいね 水客
サラリーマンの生活が慘んでゐる句。尤も類句があつて清春君の「ノータイにはらむ秋風とは淋しい」の方が洗練されてゐる。

○秋風へ鳴る風鈴を取り下し 天秋
「取り下し」は「取り外し」の方がよからう。だが句想としては「病人へ風鈴がある秋の風」と云つた句にした方が趣があると思ふ。原句は皮相な穿ちに終つてゐる。

○秋風へまだ蚊遣なごしてゐき 笙人
軽く口語體を生かした句。田園生活なんかの便りを思はしめるが、只それだけである。追つてくるものがない。

○橋の下乞食でてくる秋の風 青一
これは一寸面白い。俳句集に「秋風や失業の身を持て餘す」と云ふのがあるが、乞食の句の方が遙かに肌寒く秋風を生かしてゐる。俳句の表現し得ぬ人間味がうかゞはれる。

○秋風へロハ臺から洩れる溜息 東詠郎
第一句の調子が悪い。これは散文と云ふの外はない。「ロハ臺の溜息となる秋の風」と云ふ様に先づ十七音字に詠むことをお奨めする。

○秋風にアンテナ竿が黒く伸び 正一
「黒く」は風雨にさらされて黒くなつた意であらうが、この句の重點がそこに懸つてゐるので何だか大げさに聞える。「アンテナを残し空家に秋の風」

○秋風へちま今年の色をつけ 甘雨
俳句集に「伸び盡きし糸瓜の蔓や秋の風」と云ふのがあつて、共に穿ち味が主になつてゐるが「今年の色」と云ふ見方に、より理窟めいたところがある。

○秋風に銀の煙管の沓えた音 双亭
銀の煙管に托して感覺的に秋風を捉えた點推賞に價する。俳句集に「秋風に物の音絶え

す夜をこめて」と云ふのがあるが、矢張り川柳に人間味がある。

○大阪で脚氣の氣味と秋の風 當樂
大阪・脚氣、秋風とよい句材を捉へたのであるが、充分こなされてゐない。大阪の脚氣で死んだ秋の風」と云つた客觀態を試みることも一つの手法である。

○秋の風せめて障子を貼りませ 働樂
句がだれてゐる。それに觀點が月並を脱してゐない。「秋風へ夜學障子を貼り替へる」

○秋風の中へ見逃す蚊の 憐れ 清春
「蚊の」迄は見事な叙法であるが「憐れ」と小主觀をさらけ出したところ失敗であつた。

○秋風に拾送つた母の筆 木履
纏つてはゐるが物足りない。句を拵へたと云ふ作意が顔を出してゐるからだ。

○秋風に年増の素足細く見え 柳夢
柳夢氏近來の傑作である。すら／＼と平淡に描寫したやうでしかもよく拵めてゐる。本集句の壓巻として頂く。

○秋風にのぞき込まれた我が心 伊紗緒
純主觀の句。下五が雅拙のやうである。「酔ひしれて腸に沁む秋の風」と云ふ様に今少し味ひを出してほしい。

○秋風へランビースはやる瀬 清一郎
「秋風に立ちランビース遣る瀬ない」とすれば破調からは救はれるが、句意單調で獨創味の少ないのをどうすることも出来ない。

(從弟足を負傷す)
○縋帶の足へひんやり秋の風 琴月
氣持は出てゐるがそれは當り前のことに過

ぎない。縋帶の靴が履けない秋の風」のやうにも少し着色されたい。

○秋風へ臆病院のポプラ ちる 蛇之助
この句は單なる寫生に終つてゐない。臆病院と云ふ背景に依つて人生の無常迅速さを見据えてゐる。佳句に推す。

○秋風に帽子押へて露路を抜け きよし
秋風よりも寧ろ「北風に」の方が當て候ると思はれる位で、何等讀者の眼に訴へるものがない。

○秋風が身にしむ姑の百ヶ日 不路子
作者が川柳作句に復活されたことを先づ喜ぶ。この句は實感ではあらうが、事實を述べることに忠實で詩の心が表はれてゐない。姑の百ヶ日は前書にしてもいゝからもつと句の推敲をされたい。

○秋風が紺の秋の香をゆする 青柿
下五がちと誇張のやうである。句意は變るが「秋風へ希望に満ちた紺紺」と添削して見た

○秋の風靴下をはく松葉杖 葉光
痛々しい情景を詠んだものであるが、上五と下五が名詞になつてゐるので句の響きが堅い。ところで葉光君は最早本欄の作家ではない。

○秋風の身に沁む我は二階借 トミヤ
ありふれた感傷でしかない。「秋風へカンテキいこす二階借」と云ふ様な見方も面白いと思ふ。

○秋風へ名刺を用ふ事ばかり 紫陽
これで事實の報道に止まつてゐはしないか。殊に「名刺を用ふ」は拙い。

○秋風へ帯解く手先、他人多く 華村
作者はそう云ふやうに感じたのであらうが、そして仲々細かいところを見てゐるやうであるかどうも肯き難い。「手先も」の「も」は無論いらぬ。

○秋風へ下駄をおろした聲になり 呑空子
秋晴を思はず句で寧ろ「秋晴へ」とした方がよい様に思はれ、秋風を主題にした句としては物足らぬところがある。

故近藤鈴平坊氏は數年前「光」と云ふ題で募集された懸賞川柳「確か「現代」であつた思ふ」の一等の句「この邊は一つ番地で螢來る」に對して次のやうな評を附された。

「光に螢を題材にした句は澤山あつたが、此句は單なる光りの説明から脱してゐる、それが第一の手柄である。

第二の功は、用語に苦心がしてある。一つ地では戸數の多い郊外の新聞地を思はせる。作者はさうした境地へ身を措いて螢を見つめた。「この邊は」と云ふ上五文字は、恐らく中七文字の用語以上に推敲を重ねたであらう。

下五文字も「螢飛ぶ」と云へば、螢が澤山ゐる所のやうに思はれるが、「螢來る」は偶に螢の來る所の意で「一つ番地」と云ふ中七文字の場合に、能くそぐふのである。

螢が町中へ飛んで來たと云ふ、俳句は澤山にある。然し此句は俳想ではない、それ等の俳句が運針の正しい仕立物であれば、此句は以下六〇頁へ續く



風水害慰問句會

十月五日夜 於道頓堀俱樂部

雅幽、正明、鷓峰、禿山(出席者)

席題「肉親」 丹路選

颯風一過、その慘土に立つて雄々しくも、
復舊を急ぐ罹災の人々の上に、天の試練がご
こまでも加へられるかの如く、破れた屋根と
壞れた壁、積み上げられた汚芥を陰惨な雨が
叩く、この冷雨の中に本社の慰問句會を開い
た。
路郎主幹の講演「災害を語る」は聴くもの
、心をして再び慘禍の巷に引き入れ、そこに
川柳家たる罹災者の態度を賞揚し感銘深か
らしむるものがあつた(禿山記)

肉親は俺か死んだら來もしやう
肉親の意外あんまり露骨すぎ
一雫も呑めない兄と向ふ膳
呑みつ振りまで肉親と見られり
三行廣告に肉親愛を見せ
入墨の父はいきなり肌をぬぎ
家出した兄を案じる血の流れ
浸水のあと肉親を驚かせ
性格が違ひ肉親それでよし
肉親の一人がうなる手術室
肉親であればと思ふ人に會ひ
肉親もなく女から貰がれる
サーカスでふと肉親を考へる

禿山
蝶之助
柳次
豆秋
牛疊
山雨樓
雀踊子
幸捐
華水
白葉
末廣艸
同

肉親においとけほりをくつてゐる
蠟燭の灯に肉親の眞心よ
(佳)今日からはよその子味美しき
(同)肉親の一人帽子のまま坐り
(同)肉親の愛極道を募らせる
(同)兄は兄社會科學の中に生き
(同)肉親の見舞布團が濡れてゐる

席題「祖板」 華水選

井戸端へ出す祖板へ闇迫る
日曜の朝祖板の音もよし
祖板へ觸はきれいな腹を見せ
祖板の腕が冴えてる浪花節
申又で來て祖板に叱られる
祖板にまだ執着の鱸を振り
祖板の端に板場の巻煙草
祖板の妻はいはいと云ふばかり
祖板のほひへ猫は欠伸する
ままごとに似た祖板も二階借
祖板のからから妻の一七日
祖板もなんにも白い新世帯
祖板の音から夜が明けてくる
祖板を雨に打たして二階留守
祖板の乾きがちな世帯なり
(佳)祖板へ妹ませた音をさせ
(同)家賃延ばして祖板にある歸
(同)祖板の妻にラチカがよく聞
(同)馬鈴薯の行衛祖板持ち上げる
(同)祖板が二つお寺の臺所

鮎美
同
梅子
末廣艸
蝶之助
柳次
幸捐
水選
末廣艸
奈里
雀踊子
天國
變人
牛疊
鮎美
雙葉子
山雨樓
史呂
禿山
青兒
豆秋
蝶之助
聞路
山雨樓
雨少
雙葉子
彩池
かほる

席匾「厚化粧」 鮎 美選

厚化粧前賣切符買つてゐる 昇鯉

厚化粧フットライトに沓え返り 牛疊

厚化粧平い顔に撮られて居 紳樂

主には牌を持たせて厚化粧 亂歌

厚化粧一寸そわ／＼してゐるなり 青兒

サーピスの悪い女の厚化粧 豆秋

厚化粧ぼんやり雨をながめて居 變人

歌舞伎座へ行く妹の厚化粧 彩泡

(佳)愛慾の渦ころよき厚化粧 亂歌

(同)厚化粧くには不作と云ふたも 丹路

(同)心配の眼が澄んでゐる厚化粧 山雨樓

(同)編物の附録がおちる厚化粧 かほる

(同)厚化粧の高座の裏で待つて 同

(軸)厚化粧中折帽のすて科白 鮎美

席匾「引越し」 山雨樓選

引越しが嬉しい母の日向ぼこ 白峰

引越した當座の猫をいとしがり 豆秋

引越しは今度山手へ行くと決め 史呂

引越しのもうお隣へ借りる用 末廣紳

引越しの時計暫らく横にされ 白葉

引越しの女ばかりにひよんな沙汰 牛疊

引越しへ女の用はうすくまり 丹路

引越しに亭主は臍を出して居る 華水

引越しへ一錢落ちた音がする 閑路

引越しは皆寝着いたにおびえきて 禿山

引越して一息すれば月も出る 青兒

タクシーで引越して来る 二階借 梅子

引越しに心残りの葡萄棚 蒼梧樓

引越しに好意を見せぬトラツク屋 亂歌

引越しを暫く延ばす定期券 雨少

引越しへ家主から来るかやくめし かほる

「鐵筋の學校へやる」そうて越し 梅子

水害地綱帯巻いて越して行き 紳樂

引越しは屏風の無事をたしかめる 彩泡

引越しに子供二階を嬉しがり 同

引越しの荷物の上にある鏡 蒼梧樓

(客)引越しに妻らしくする許婚 天國

(同)引越しの慢性山の色に飽き 雙葉子

(同)引越しの門の柘榴がうれしき 亂歌

(同)引越しの露路はハンドル三度切 鮎美

(同)引越しに借る提燈が大きすぎ 白葉

(同)引越しに掃除に來れば薬瓶 幸捐

(地)アパートの引越しオートバイが來る 禿山

(天)引越しも日に讀みなほす額の文字 豆秋

(軸)引越しに降り出す雨をつのり 雨少

兼匾「復興」 萬よし選

復興の意氣バラツクへ月が沓え 山雨樓

復興へ隣人愛の尊とさよ 没食子

夜の女もう復興へ白い腕 翠夢

復興の町早起きの人がかり 新市街

起き上る意氣のシヤベルに陽が躍る 蝶之助

復興の父青訓の服を着て 梅子

復興にハイライ邪魔な位置にある 柳次

復興へ妻の悲壯な乳パシド 雨少

歎聲を上げてボラに火を入れる 豆秋

復興の庭に木犀香を散ち 彩泡

労働者だけへ復興景氣よし いわな

復興の雨の音きくトサン屋根 亂歌

復興の雨の音きくトサン屋根 亂歌

復興の雨の音きくトサン屋根 白葉

復興の雨の音きくトサン屋根 豆秋

復興の雨の音きくトサン屋根 鮎美

復興の雨の音きくトサン屋根 雀踊子

復興の雨の音きくトサン屋根 奈里

復興の雨の音きくトサン屋根 山雨樓

復興の雨の音きくトサン屋根 雅幽

復興の雨の音きくトサン屋根 正明

復興の雨の音きくトサン屋根 華水

復興の雨の音きくトサン屋根 かほる

復興の雨の音きくトサン屋根 山雨樓

復興の雨の音きくトサン屋根 華水

復興の雨の音きくトサン屋根 蝶之助

復興の雨の音きくトサン屋根 牛疊

復興の雨の音きくトサン屋根 史呂

復興の雨の音きくトサン屋根 末廣紳

復興の雨の音きくトサン屋根 梅子

復興の雨の音きくトサン屋根 白葉

復興の雨の音きくトサン屋根 豆秋

復興の雨の音きくトサン屋根 丹路

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし

復興の雨の音きくトサン屋根 萬よし



煙

住田 亂 耽 選

煙幕と名の付く花火買はされる 春帆
 親子共工場の煙で生活して來 彌生
 燻るだけ燻つて濡藁燃上り 菊路
 黄昏へ煙放浪者に似てる 小松
 見送る煙一筋に伸び 曉童
 獨り身へ煙が叛くやうに逃げ 史郎
 消防署煙を見張る役もあり 寒草
 煙だけ見れば平和な日暮なり 耕一路
 非常時を煙にまいた盆踊 天柳
 借家札煙と風を考へる 彩泡
 雲低う煙はしばしばとまれて 喜由

煙大きく工場の朝だ 七風
 大阪の煙を吸うてよく儲け 青兒
 一掴の灰になるまで燻らう 葉光
 ひとすじの煙り夜業の粉煙草 いね三
 解體船名残りの煙吐いてつき 奈里
 落葉たく煙みつめてゐる 尼僧 史呂
 退屈な窓へ煙が忍び込み 久米雄
 けむり無事門衛靴を磨いてゐる 春秋
 晝火事のいきなり消えた 白煙 阜山
 言譯の中をバットの三本目 嵩喜固齋
 煙突の煙り舊市の空へ伸び 青果

枕

永田 里 共 選

里 十九 選

枕元通るがいやな二階借り 彩泡

川柳家戸籍調(續)

(係) 山雨樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 出生地 (4) 現住所 (5) 生年月日 (6) 職業又は勤務先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

(11) 藤井好浪

(1) 藤井貞造 (2) 好浪、京極右近 三條禎子 (3) 京都市三條通河原町西入 (4) 同所 (5) 明治二十八年三月生 (6) 紙工品商 (7) バット二つ親しく話す用意あり (水府 不甲斐ない亭主の足へ夜着をさせ (半文錢) 父に似て氣のよいことをあやふまれ (微塵) (8) 爛漫と日本さくららの國となり。嬢さんと女中がしやなり (9) 春 (9) 日本郵券及葉書、木版一枚摺、双六の蒐集及研究 (10) 妻と子供二人 (男女) (11) 毛虫 (12) 大正四年頃。

(12) 柴田午郎

(1) 柴田午郎 (2) 午郎 (3) 島根縣能義郡母里村 (4) 同右 (5) 明治三十九年四月二十八日 (6) 株式會社に松江銀行に勤務 (7) 行水のあととは灯して女たち (微塵君

丸髻にまだなれきらぬ塗枕 喜由
 子が三人枕が三つはづれて居 青兒
 手枕のまなまお座敷待つてゐる 籬千代
 木枕がなく寝付かれぬ里の母 双亭
 奉公の涙を 枕吸ふてくれ 春秋
 きつちりと枕に寝るは宵ばかり 利生
 就職が出来て 枕高う寝る 静波
 純情な顔が枕にうづもれて 禧純
 水枕さかさに吊つて恙なし 史郎
 手の届く物を枕に晝寝なり 禿山
 日給の軽さ 枕の下に敷き 蛙庵
 膝枕酔ふた酔ふたで横になり 同
 母ちやんと寝やうと枕抱て来る 春帆
 心うれしく可愛い枕縫ひ 不路子
 手枕でうたふ赤城の子守唄 祥月
 高すぎる 低すぎる 病枕 山月
 朝の陽が朱塗枕へまともなり 曉童
 寝つかれず枕の位置をかえてき。 花鳥
 ある時は女房にすまぬ膝を借り 菊路
 手枕をして當てのない宵を寝る たけを
 トランクの枕は狸寝いりなり しとし
 生活に疲れて枕はげてゐる 一青
 板の間へ枕がかゝる暮しなり 末廣卿
 富士近く旅行枕の呼吸を抜く 青果

呉服屋へ枕を提げて病み上り 新水
 灰皿をひきよせてみる 枕元 寒草
 手枕の重さ頼もしい子の寝顔 双亭
 丸髻が少なくなつた塗り枕 小松
 旅日記枕のかたい事も書き 小樓
 待たされる夜の枕がまつ 白い 豆秋
 水枕とれたうれしさ手紙書く 白英
 (軸)壁一重隣りもこゝが枕元 里十九

◆ 機見女選

塗枕一つ部屋をば艶めかせいの助
 枕に頸をのせる宿帳 いね三
 新世帯客の枕が無いのなり 不路子
 清算の心も折れて仇枕 春帆
 慰める言葉を捜す枕許 葉魚
 家出して早や五ヶ月のひち枕 素描
 箱枕明日の手くだを考へる 笑己亭
 枕紙濡らして女寝てしまひ 利生
 梅恨の枕に落ちた青い月 久米雄
 木枕が無く寝つかれぬ故里の母 双亭
 朧枕月の丸いを褒めて居る 青兒
 水枕さかさに吊つて恙なし 史郎
 北枕構はず宿直寝てしまひ 山月
 旅日記枕の堅い事も書き 小樓

見給へほうれん草がのびてゐる(路郎)手
 傳つたのは百燭を替えたゞけ(水府)(8)
 年とつたことをはつきり二日酔(6)食ふ
 こと(10)妻慰子(11)鳥獸の嬰兒(12)昭和
 三年八月。

(402) 梶谷巷二

(1)梶谷忠三郎(2)巷二、粹句樓(3)松
 江市雜賀横濱町三〇(4)同(5)明治四十
 四年九月二日(6)出雲電気株式会社(7)
 名を捨て、十七八の戀もせん(路郎)(8)
 鐵骨の下に小さくカード級。ペンダコに
 開けば披露されません。春夏秋冬驛は變
 らぬ定期祭(9)讀書、謡曲(10)ナン(11)
 たくさんあり書けません(12)昭和三年冬

(403) 梅田如宏

(1)梅田爲久(2)如宏、舊號に桃源と千
 秋(3)滋賀縣木津市松本町(4)名古屋市
 中區金澤町一丁目(5)明治四十二年一月
 三日(6)大坪商店卸部販賣部長(7)兒の
 かほのくるいくらし(半鶯)雀しづかにく
 れてゐる(さよし)(8)お別れしてからの
 道が冬月。ほつかり星の雪道をいそぐ。
 (9)短歌、俳句自由律壇の研究と柳樽以
 前に於ける俳諧史の研究(10)今年二月か
 らの愛妻と子はこの暮に一人?(11)ただ
 句を作るのみの定型作家(12)昭和二年秋
 より定型川柳に入り、昭和八年六月から

ひくつもり落籍すつもりの膝枕 菊 路
 手枕のしびれもうれし孫の顔 美津女
 水枕とれたうれしさ手紙かく 白 英
 手術臺生死を委せ枕する 牧 人
 ばらの花が散つた枕はづる 一 青
 母連れて空氣枕の要る夜汽車 史 呂
 朝の陽へ父の枕と子の枕 末廣艸
 水枕子供の無理が続くなり 銀 波
 五分刈にした夜の枕きたなすぎ 令 風
 枕はづしてりん落の女達 新市街
 待たされる夜の枕がまつしろい 豆 秋
 凝つと寝る枕に神を信じてる 新 水
 枕カバー換へ歸省の子をねかせ 彩 泡
 足藝は舞臺へ枕もつて来る 同

(五五頁より續く)

意匠の自由なる刺繡である。

川柳と俳句の區別をよく質問する 讀者があるが、此句を鑑味するなら自づから解ると思ふ」とあつた。この仕立物と刺繡との比較は面白い見方である。

僕は川柳は人間味中心のものである。と云ふことを提言する。俳句が自然の心を心とする靜的な平面的な詩味を尊ぶのに對して、川柳は飽くまで人間の心に終始する 動的な立體的な詩味を要求するのである。尤も人間の心と云つても感情の強弱があり、そこに思想

初旅へ空氣枕の息を入れ 葉 光
 凡人の夢に枕はなかりけり 同
 手枕に白い腕を見せて處女 春 秋
 友泊めて一つの枕ゆづり合ひ 同
 其の上にまだ慾があり籐枕 曉 童
 枕の數を妻と見つめる 同

感 吟

言 譯 を考へ枕裏返し 紫 陽
 うたたねの枕宮島の煙草入れ 雛千代
 手枕や男四十の厄を寝る 朝 雨
 病舎なる枕につきぬ青い空 新市街
 箱枕すれば女は口が開き 喜 由
 惡友の來て座蒲團を枕にし 彩 泡
 代診へ枕を縦にして話し 青 果
 片親の聲が聞える水枕 同

や信仰の力が加はつて、深淺廣狹の差はあるが、兎に角人間の偽はらない 裸の言葉が十七音字と云ふ(或はそれ以内の) 簡潔な詩型に壓縮され洗練されて、彈力と魅力を備へる其處に柳味と稱する一つの詩的精神が生れるのである。これは川柳へ志すもの、忘れてはならない根本且つ絶對のものである。

次 課 題

「戀」十句以内、切十一月十日
 宛先 大阪市浪速區湊町保線事務所福田山由樓宛

清算自由律川柳を起して今日に至る。

(45)

芝 四 葉

(1) 芝實壽(2) 四葉(3) 伊豫東宇和郡土居村古市(4) 同所(5) 明治三十四年二月十九日生(6) 旅館(7) 秋さらり銀の襖のものおもひ。ひとり居ればひとり限り無く淋し。酒とろり、大空の心かも(以上路郎師)(8) 夕烟り手も歸らう母が待つ。魂をさぐれば春の宵を泣く(9) 尺八(10) 有妻無子(11) 女(12) 昭和八年五月

(46)

石 丸 晴 朗

(1) 石丸春重(2) 春峰改め晴朗(3) 愛媛縣温泉郡堀江村字權現(4) 松山市西立花(5) 明治四〇年三月二〇日(6) A B C 食堂株式會社(7) ひとりゐればひとり限りなくさびし。君見たまへ渡菰草が伸びて居る(以上路郎師)茶碗の丸さ樂しみに満つ(山雨樓)考へを直せばフツト出る笑ひ(五健)(8) 残念ながら發表する程の句はありませぬ(9) 野球(スポーツ)何んでもよし) 魚釣、将棋(10) 妻あり子供男子二人(11) これと云つてありません、まあ鹽から位でせう(12) 丁度ハツキリ致しませんが五六年前海南新聞へ投句したのが始まり。



古狸窟雜筆 (八)

梅木塵山

(八一) 夏 鶯

昔より鶯の和歌には、梅の花をよみ添へたるもの多けれど、これに卯の花をよみ添へたるものあり。

「萬葉集」卷第十。夏相聞

鶯のかよふ垣根の卯の花の厭きことあれや君が来まさぬ。

(八二) と や

遊女などが花柳病に罹りて、髪の毛の脱落するを、俗に「とやにつく」といふ。此れは雌雞の鳥屋に就きて、羽毛の脱落するに譬へたるものならむ。

「凌雨漫錄」

髮結、駕舁も又此トヤと稱するものを患ふ。其症候遊女と違ふ事なし。猜此原を勘ふるに、駕舁も、髮結も初年の内は、

腰部にのみ凝て、こゝに一箇の病根を生

すればなる可し。遊女、は勿論の事也。

腰部の病上衝しやすし、因て髮鬢脱落に至るもの也。

(八三) 雨足風手

雨の足、風の手といふ事あり。されど雨の足は、古より歌によまれ、文に書かるれど、風の手といふ事は無しといふ。

「世事百談」卷之一

風はよく物を動かすこと手あるが如く、

雨は一むらふり過ること足あるが如しとて、風の手雨の足といふことあり。雨の

足は唐山にてもふるく、雨足とも雨脚ともいへり。晋の張景陽が雜詩に、雲根臨

八極、雨足灑四溟。又云翳々繁雨、森々散雨足と文選に見ゆ。蘇東坡の詩に疎々

雨脚長などともいへり。和歌にて平兼盛集に「君を思ふかすにしとらばをやみなくふりしく雨の足は物かは」蜻蛉日記にけふは廿四日雨のあし、いとのかかにてあはれなり。「ふる雨のあしともおつる涙かなこまかに物を思ひくだけば」など見えたり。風の手といふことかつてもに見えず、云々。

(八四) 富士田吉次

「吉原雀」といふ長唄の作曲家富士田吉次に就いて一悲話あり。

「雅俗隨筆」中卷

長唄吉原雀は、富士田吉次の作なり。其首章に、「凡生けるを放つこと、人皇四十四代の帝、孝昭天皇の御宇かよ、養老四年の末の秋、宇佐八幡の託宣にて、諸國に始まる放生會、生々」孝昭は元正の誤なるを、ふと思錯てかう歌はせたりけるを、此唄いたく流行てうたはぬ者なし。後に孝昭の謬なるよし人にきき、我そさるなりしを愧つても、さすがに歌改させんも便なく覺え、常に心憂き事に思ひ煩ひのたりけるが、重き病にかゝり、ほと／＼死ぬべくなり果ぬれど、此事心にかゝりて、息引とることあたはず、當時長唄の本の板元西宮新六、それが妻心

きゝたるものにて、吉次の枕により、件
の吉原雀の本、孝昭を元正と彫改たれば
今より後、元正とうたふ事になりぬと、
實しやかに告げれば、さては心安しとて
打笑むとひとしく息たえ死失けりとなむ
按するに、此吉原雀の稽古本は、後に孝
昭を、元正と改刻したれども、近世に到
りて發行する稽古本には光正天皇と誤り
をれり。

(八五) 扇子の持方

扇子の持方に種々あるが如し、されど小
笠原流の禮式には無き事なる可し。

「一舉博覧」

蝙蝠あるひは扇子を隨身するには、常に
手にもつ也。懐中の時は柄の方を懐中へ
さしいるなり。右の方の腰にさすときは
は笛指といふ。うしろにさすは矢筈指と
いふ。左の腰にさすはなき事なりと或人
のいへり。

(八六) 宮 刑

支那に於て行はるる、宮刑といふものは
いはゆる去勢の事にて、陰莖を截切する
といふは、誤謬なるが如し。彼の宦官と
稱する者も、去勢したるものにて、陽莖
はそのまゝ存しをるものならむ。

「橋牌茶話」卷上

宮刑者、割ミ法勢。勢者辜丸也、非截ミ
男根也。馬曰ミ騙音。扇朝鮮所ミ送養ミ於
官廐。比常馬稍大不能交。騙音扇。
俗名ミ幾半奴氣武麻。

女子幽閉者、囚ミ之於淫室也。俗誤爲下
鉞閉陰戸ミ之義也。陰戸可ミ鉞而閉ミ之耶
(八七) げんこ
棒手振などの隠語に、五の數を「げんこ」
といふ。

「宅山石」卷之四

古老の説に、民間の卑諺に、五つの數を
げんこといふ事は、阮古切五なればなり
と、果して然りや否はしらず。按するに
阮古の切などいふは、學者の附會説にし
て採るに足らず。げんこは拳固にて、握
拳は五指なるが故に、五の隠語としたる
耳。

(八八) 殿の字

我邦にては、殿の字に、一の讀法有るが
如し。

「後松日記」卷之四

殿の字は、清音によむこととおぼゆ。殿
上人、殿上、殿下など、皆すみて稱する
なり。

(八九) しゃあ

鐵面皮にして、羞恥の愈少なき態を、俗

に「しゃあ」といふ。其語原は明か
ならずといへども、説あり。

「關秘錄」卷之五

車捨は豊後の邊に居す。肴など商ひける
者なり。百姓の交もならず、尤縁をも結
ばず。其類計にて暮す。○多にもあらず
○多同前也。俗にしゃあと呼。魚など賣
るにもしゃあよと呼。人に不構つ
んとして居る者を、京江戸にも、しゃあ
として居るといふ。猶江戸にても、しゃ
あとして居ると云なり。

(九〇) 往 來

近來出版さるる雜誌などに、何々往來と
稱するもの尠からず。この往來といふ文
字に就きて、古來異論あり。

「東廬子」卷之四

庭訓往來、風月往來などと云て、往來の
字を書翰雜筆の通稱と思へるにや。往來
とは禮記に、禮尚往來と云より出たる
名なる故、庭訓、風月などは、狀毎に反
報ありて禮をそなへたり。往來の字相當
せり。爰に商賣往來と云もの有り、元祿
の頃、京都の訓蒙師堀流水軒といふ人の
著作とかや。唯一帖の物に往來と號しこ
といかんぞや。云々。

各地柳壇

いのちのるを創り



路馬・緑雨・柳・樂・整理

本社同人茶話會

九月二十七日夜 於カナメ喫茶店 綠雨報
當夜茶話會を風水害罹災者の 對策協議會
に變へました。出席者、路馬先生、山雨樓、里
十九、丹路、新水、柳樂、華水、竹楓、豆秋
水車、馬路、青兒、九波、春光、夕鐘、機見、
女の諸君と私。

秋さりり風かみて歸にほはせて 路馬 郎選
一日に一升米が消える秋 夕鐘
秋や秋庭の隅にも鳴いて、呉れ 山雨樓
夏だると秋であらと我が子の死 開路
アパートを借るか秋の夜のはこ 青兒
教室の無い子供らへ秋の風 豆秋
秋の物みんならべて日曜日 同 水車
避難所のトタン一重に迫る秋 同 水車
コスモスに足止めれたピクニック 華水

椽先の煙草へ 秋の月が来る 同

川柳雜詠社 畔柳社吟行 (大阪)

十月十三日

於キング喫茶店

汗ばむ位の絶好の吟行日和。風變りに市中
漫歩の吟行。湊町保線事務所に山雨樓氏を誘
へば、社用でお越しの路馬師と落合、一時二
十分、本社同人與三郎氏の参加を得た一行路
馬師を取巻いてキング喫茶店に、雪崩れ込ん
で句座を開く。兼題席題披露 談笑裡に路馬
師の歡待をうけ、五時近く再び隊を列れて住
吉に向ひ、暮色迫る住吉神社に參詣(某人記)
兼題 神 社 路馬 郎選
お神樂を見てゐる顔へお賽錢 木履
氏神の額祖父さんの逸話きく 九天
引越しの荷物神社を横にぬけ 水客
(人)不眠症神社へ煙草喫ひに来る 某人
(地)拜殿へラヂオ體操の手が揃ひ 山雨樓

(天)ほととぎす拜殿へ彌宜沿衣で出 某
(軸)結婚に来て鶴までも神々し 路馬 郎選
兼題 石 山雨樓選

ツンとした艶大理石の柱立ち 天 秋
石を割る作業因人めいて見え 與三郎
標石の文字讀み難い舊街道 秀太
石垣に野菊風を知らぬやう 九天
で、虫が漬物石へ梅雨を這ひ 明 天
やるせなき磯邊の石のまんまりき 水 八
小石けつて秋の心を見つけたり 久米雄
満潮が小石を呑んだ 氣味悪さ 木 履
庭石へ貧乏人のひがみが出 某 人
天主閣豊太閣の石の 苦 木 履
(人)旗持の休んだ石へ夕日延び 明 坊
(地)代々の墓石にかくしきれぬ嘘 九天
(天)石投げて柿の在所を通りすぎ 與三郎
兼題 疲 勞 山雨樓選
大饑つかれた様に鯉とゐる 水 客
旅疲れいつか忘れて温泉の匂ひ 明 坊
くたびれて歸れば時計とまつてる 九天
旅疲れ何やら影つた石に掛ける 某 人
乗る汽車の見えて疲勞の走らされ 木 履
子守唄とぎれて妻の寢息なり 天 八
(人)リツクサツク京極。夜杖を引、 與三郎
(地)ピクニック疲きこるぶ秋の空 秀太
(天)門の音賣り出しの疲れが出 某 人
(軸)疲れると父牛に似て動かない 山雨樓
兼題 金 持 與三郎選
金持にされてる袖を風が吹き 秀太
戸締りへ金持といふ眼が覺める 某人
懐手大家きまつた用もなし 明 坊

湯疲れを手摺に任す曲線美 五健
物言はぬ女の疲れ癖が落ち 同

柳翁忌 (島根)

九月二十日 於緑之助居 緑之助報

兼題 月 緑之助選

問借りして月を二人で見ると 恒太郎

月明り噂の女にふと出會ひ 琴月

月明り 銀鱗にみる漁の味 紫光

名月へ夜汽車の音の 牙え返る 田

(住) 夜業の灯何時窓邊に月が落ち 比佐緒

(同) ひるの月紙の影似て来たうら 羅門

席題 出 水 田鶴緒選

大出水恐怖の裡に明けかゝり 紫光

出水へ對岸の鐘鳴り渡る 比佐緒

出水を氣づかふ夫婦窓を閉め 琴月

(住) 水、水一望深となつて荒れ 紫光

(同) 稻の穂をゆすり出水増すば 緑之助

同指 比佐緒選

指輪をした儘死んで行きまし 紫光

手品師の兩手の指に持つ偉力 田鶴緒

指先の情熱かくもおのゝいて 緑之助

指くみてをんなのまみにある疲れ 羅門

(住) 指の節一家が食ふてゐる太さ 緑之助

(同) 日めくも指折り數へ待つ便り 田鶴緒

同秋 羅門選

足元秋ひんやりと忍び寄り 琴月

工場の煙高く消えて陽がしるい 田鶴緒

空想の鼻へ稻のほびがムツと来る 緑之助

(住) 虫よく鳴いて追懐をひろげ 同

同 サークラス 琴月選

サーカスのクインと寄て故郷戀し 田鶴緒
サーカス圍今着く驛の人だから 比佐緒
サーカスの少女さびしくませて 緑之助

松江川柳忌 (松江)

主催 川柳維誌社 松江支部

仲秋の九月廿三日 前記三川柳會共催の下に

松江川柳忌を修す。市内出雲ビル四階に於て

盛況裡に閉會集る柳人四十數名定刻午後七

時席題の發表後奈良井柳人氏閉會の挨拶を

以て始まり作句後柳談に川柳翁回想談に打

浴け十時半各還句披稿、次いで津川紫吻氏の

閉會の挨拶(幹事記)

兼題 合 掌 紫 吻選

合掌の背後に誰か来た氣配 糸葉

合掌をすまし居士の逸話なき 華雪

合掌のそれから先は聞き取れず 玉葉女

合掌をしてる姿にすぎはなし 砂詩朗

合掌のそこに人間らしい顔 可明

合掌の生涯さびしトロヒスト 一雄

合掌の一人せわしい息となり 柳人

合掌をすれば晴れ行く吾が心 祥月

合掌の眼上げれば蓮の花 卷二

(佳) たまゆらの命合せた手にゆ 都之介

(同) 合掌の悔多き目をふと忘れ すなな

(同) 合掌へうつせみ事の悲しくて 一三六

(人) 合掌にうつつ足る氣を抱き 無鐵砲

(地) 合掌へしげし足る氣を抱き 一三六

(天) 合掌の心明るいものに觸れ 雪丸

兼題 圓 滿 雪 緒選

この上の努力圓滿主義に生き 大鳥

圓満な話になつて圓滿漢ませ 可明

圓満な話に通つて主義もなく 紫葉

圓満に話を付ける金が要り 尖道郎

圓満に子のない丈けが淋しまれ 天痴人

圓満なお酒は家で飲むばかり 雪丸

圓満な夫婦に秋の夜が長し 玉葉女

圓満な空気にひたる共逢ぎ 緑之介

圓満な顔と動物園で逢ぎ 三電波

圓満な家庭に掃除行きてごき 一三六

圓満な孫の出来ぬを淋しがり 舟帆

死顔は圓滿だつた事に 天痴人

兼題 極 樂 都之介選

極樂の話しになつた薬瓶 三雷波

線香の匂ひ極樂近くなり 卷二

極樂へ行け君の骨なりと 祥月

極樂へ来たら意識する階犯 緑之助

極樂をせらも囂つて思想犯 天痴人

(佳) 本堂に皆極樂へ行ける顔 子風

(佳) 極樂往生の話へ母の脊がま 逸行

(佳) 入棺はもう極樂へ行つた頃 夢迷

(佳) 洪水を極樂にして水すまし 夢迷

(佳) 極樂はこゝだと母の長湯なり 可明

席題 高 原 丸選

高原の先に大きく月が出る 可明

高原で亡き戦友をなつかしみ 大鳥

高原に只一軒の灯がともり 雪丸

高原にたゞ清浄な我となり 子風

ビクニツクふと高原の唄になり
高原の鳥を無氣味な嵐吹く
高原の夜を嘶き聞くばかり
高原の花はキヤンキヤンに折られ
高原に啼く雷鳥が訝して
高原の露に濡れてる繪封筒
（佳）高原へ来て白樺の傾りなり
（同）高原を二人の世界にして歩き
（同）高原の神秘へキヤンキヤン
（人）高原に壯途の夜が更けわたり
（地）高原の果てく人とらくだ行く
（天）人は皆寝た高原のこるる月

疑はれ乍ら友情つゞけてゐ

友情が肩をたゝいた純喫茶
友情を感じて酒を飲みすこし
失戀をして友情が身にしみる
友情かしみく知つた退院日

級長の弔詞へ瞭熱くなり

席題 毒瓦斯 柳

毒瓦斯の様な焚火へみんなむせ
毒瓦斯に袖圖の日本は小さすぎ
國防と云ふ毒瓦斯を見せられる

毒瓦斯に苦しんでゐた夢がさめ
毒瓦斯の風にゆれて来るゆきて来る
毒瓦斯へ軍用犬も血を吐いて

毒瓦斯は次の世界戦を待つ
（佳）毒瓦斯へ餘り離れて蛙飛び
（同）毒瓦斯へ大きく土蔵建つて
（同）毒瓦斯にさハンカチが慌てり
（同）毒瓦斯の秘密を探る人が住み

大鳥 九紫 紫吻 祥月 夢迷 勤一郎 糸葉 逸行 三雷波 文兒 丹帆 鳥選 可明 三雷波 卷二 可明 可明 尖道郎 人選 舟帆 磨須雄 遊水 天痴人 紫吻 同 卷二 文兒

（同）毒瓦斯の一尺上を赤蜻蛉

席題 ハイヒール 無鐵砲選

一畑の石段に疲れたハイヒール
白状をする事がありハイヒール
同性と並び無口なハイヒール
托兒所へ愛児を置いてハイヒール
ハイヒール女らしさを忘れかけ
ハイヒール感傷的なお嬢さん
ハイヒール青ちが違ふ脚線美
ハイヒール日本髪を連を抜き
喫煙を氣障に股いだハイヒール
芝居氣も見せて銀座のハイヒール
獨唱が出来そうにゐるハイヒール

投げキッス路を隔て嬉しさう
接吻に女の肩は瘦せてゐた
接吻のそれから人を怖れたり
口づけを死んだ氣持で受けてます
接吻へニンニク臭い息を知り
接吻のボツクスちつと靜かなり
ほろ苦い別れる月夜の接吻
眼を閉ちてする接吻を叱られる
接吻はこばみ通して惚れてゐる
（佳）接吻を初めて知つたボーイの
（同）もう處女でない接吻の長い
（同）接吻を忘れてゐないくらんぼ
（同）接吻を見届けてゐる戀敵

願出して子供小さい意氣を見せ
意氣はなほラツキシーペン待て居
意氣込みをあぶながら十八九

席題 意氣 九

尖道郎 柳坊 卷二 紫吻 尖道郎 玉葉 祥月 雪丸 一三六 紫吻 柳坊 三雷波 當人 柳坊 無鐵砲 二選

無鐵砲 尖道郎 一性 都之介 紫吻 春朗 磨須雄 可明 無鐵砲 一湖 天痴人 莞路 可明 紫選

玉葉 都之介 逸行 紫選

見込まれた意氣を自信の胸に秘め
その意氣へも一杯強ひられる
意氣がやゝ合ふて歩調の揃つてき
意氣だけには眞氣で居る父のいぢ
あがる意氣でかし母には淋しまれ
此の意氣で勝つて歸れとはげまれ
大倉旗意氣でスル／＼昇り行く
病床で愛人だけに示す意氣

川柳 螢ヶ池句會

雜語社 十月七日 石森靜太郎

お互に相勵まし合ふことを目的として今月
け雜吟一句宛を句會席上合評とした。本社よ
り與三郎、史呂兄の出席下さつて、最後に私達
のためにハ・モニカを演奏下さつて慰さめ
下さつた事には泪の出る程悦しく感謝に耐
えなかつた

策題 雜吟 高點順 五

やつれをばうつすがみのそりじが
一日を働き終へり親と子と
交換手あかるい咳をしましたね
病室へ見舞の えがく 社會相
奇麗な空に果てなきなやみすて
くちづけへ秋の扇が目にとまり
小氣味よく無賃は咎められてゐる
慾すてし心のすきへ 秋が来た
今日からは父なし母に宛名する
秋の日は音なく暮れて終ひしり
秋 立つ水がお美味しく
めぐりくる秋はこゝろをもつれ

松生 流之助 靜太郎 志洋子 緋紅 與三郎 史呂 公平 一更 愚籠 卷二 巴

子風 糸葉 錦葉 戀紅子 紫吻 錦葉 山川子 紫吻

子風 糸葉 錦葉 戀紅子 紫吻 錦葉 山川子 紫吻

兼題 髪 與三郎選

お化粧と髪の手入れに灯がついた
髪きつてしづかな雨をきく日なり
淋しくも黒き髪もつ人形よ
髪結びが覗く浮世の面白し
ぬけ毛捨つ指のむこふに秋の雲
斷髪へ病氣にかゝりはてになり
陽當りに白髪抜かせる背を圓め
秋の雲流れてきみの髪にほふ

兼題 落葉 史 淡
掃きよせる落葉へ尼僧の夢淡し
落葉焚く老夫婦笑へる日もありて
落葉焚く修道院の庭靜か
口笛口笛夕暮の落葉をふんで
落葉カサと鳴つて誰もゐない
落つる葉のころにふるる朝にも

兼題 足音 愚 龍選
足音も遠ざかつてく冬の月
足音を聞く十六の戀となる
かんどふら寄宿へかえる靴の音
足音に洗濯の娘がふり向いた

兼題 車 流之助選
涯しなき道を馬車行く濁雲
大阪の街に車で生きてゐる

川柳 今治句會 (今治)
九月二十二日 曉童居 曉童 報
豪雨の避難所として期せず三人飛びこんで
來る衆議一決たちまち小集句會とす

兼題 養子 十 靜選
養子など行かぬ氣小をためてゐる

紫陽

ひとことを養子重たしき返し
へい／＼と云はす養子のまだ若し
子が出來てから養子の酒も知り
(佳) 頭らかな養子の顔へ子が生れ
(軸) 教員と云ふ眞面目もらは

兼題 髪 曉
平凡な男になつた髪の色
酒愚痴へ女房は髪を結びに立ち
結び立ての髪コスモスを摘んで
さんな氣であるのか女髪を剪り
(軸) 髪なで、公衆電話願を待ち

兼題 裕 紫 陽選
肥へてゐて裕をきらふ女にて
裕の肩をすべる太陽
縫ひあげを隣へたのむ裕が來
(佳) お祭のしらせとついた裕物
(軸) 裕着て去年と同じ懐手

兼題 手摺 小 松選
伊達卷く手摺に寄つた旅の宿
抜けて來た藝妓手摺へ身を任し
久し振りだつたを手摺から話し
手摺から面白くみる俄か雨
まぶしゆに笑つた手摺を見上げ
(軸) 本當をききたく手摺までさま

川柳雜誌社 大地吟社 (島根)
兼題 眼 紫 陽選
十月六日夜 於綠之助居 尼綠之助報
眼頭を細めて淋しい女です
云ひ勝つた淋しき酒に眼を伏せる
ちつと聞く潤りなき眼に傷れず

兼題 草 村
草 村
草 村
草 村

兼題 虹 太 郎
虹 太 郎
虹 太 郎
虹 太 郎

平靜を装ふてゐる眼を反らし
盃を置いて妻の眼を盗む
アパートの朝焼け眼鏡拭いてゐる
(佳) 戀はなまけ眼もておじぎ
(同) あげばなしの心に押され眼鏡
(秀) 眼を盗むころをとがめう

兼題 同寺 紫 光選
寂滅へ紅葉の寺の鐘の音
朝霧は木魚を流るゝ秋の寺
亡き母を偲ぶお寺の靜かなり
尼寺に沈黙の夜が訪れる
人生を斯くと信じて寺に住み
(人) 眞直ぐに詫びる心を寺に連れ
(地) 木の葉くる／＼人氣に舞
(天) 山寺の落葉旅僧の眼の澄みて

兼題 秋空夜星 羅 門選
星沓えて感傷の夜を耽る
芒野の出來事星のみ知つてゐる
秋空の幾度も變つて夜に入る
星空は沓えて我が身はうつろなる
秋空夜星沓えて／＼白き息を吐く
お互の別るゝ爲の秋空夜の星
(人) 秋空へ火を噴く思ひで夜の星
(地) 落ちそうもなく秋空の底に星
(天) 雨を降らして秋の星溜ゆる

兼題 同 久し振り 與詩雄選
久し振り同じ思ひの眼がうるみ
久し振り罪な男にされてゐる
(人) 碇打つて久しぶりなる靴すれ
(地) 復活の意氣に張り切る久し
(天) 久しぶり父の白髪に考へる

兼題 比 佐 緒
比 佐 緒
比 佐 緒
比 佐 緒

兼題 大 泉
大 泉
大 泉
大 泉

兼題 草 路
草 路
草 路
草 路

同 疲 勞 草

疲勞をば忘れた秋の句の集ひ
失意の疲れを床にぐる巻く
疲勞した影五燭に生々し
疲勞した夫婦に可愛い手は笑ひ
(秀) 疲れ切つた駄馬の頬づゝ秋の風
(同) サンデーのブラン疲勞消遣へ
(同) 終事席畫の疲れの欠伸囁む
(同) 大欠伸二つを切り寝てしまひ

路選 比佐緒 朴 泉 石楠花 好 郎 大 郎 與詩雄 絲之助 同

川柳 松江例會 (松江)
拾月五日夜 天神境内於ミドリ喫茶園

兼題 父 路選 報

日記帳以前を知らず父の筆
慘酷な父と私生兒敦へられ
遊蕩兒父の弱點握つてる
嚴格な父に意外なローマンス
(佳) 明日からは父で有る月給日
(同) 父親の強氣悲しき戀にさせ
(同) 心追ふ心に父の影がやせ
(同) 優勝戦父は觀衆の外にある
兼題 エトランセ

一 湖 卷 二 夢 迷 砂詩朗 一 湖 卷 二 柳 人 山 川 兒 二 選

エトランセまづ雨干をうれしがり
印象にあの妓が残るエトランセ
エトランセノルタルザヤな感じ
愛嬌をたゞ有難うエトランセ
エトランセへ鋭く光るスパイの眼
種板を女中に頼むエトランセ
エトランセ舞妓へしばし見惚れ
女には話せぬ男 エトランセ

砂詩朗 荒 路 夢 迷 砂詩朗 勁 一 郎 山 川 兒 逸 行 柳 人

(佳) 別れは恋なりエトランセ
(同) 大阪は唯煙だつたエトランセ

歸省して仙人掌の埃元のまゝ
仙人掌が大さく成つた獨り者
仙人掌の葉へ空想冷へて行き
仙人掌の様に僕も武裝をしてゐた
仙人掌をいぢつて暮れる病上り
(佳) 貧乏な趣味にし仙人掌の大輪
(同) 嘲つて朝仙人掌の庭を出る
(同) 仙人掌の趣味が無口にして

荒 路 山 川 兒 葉 選 一 湖 夢 迷 天 痴 人 荒 路 勁 一 郎 夢 迷 柳 人

責任は持たぬ美男のふところ手
吳服部の店員にして美男なり
易學も矢張り美男と認めたり
女から熱を上げてる男振り
あつさり和美男チップを切つて立ち
原籍はさうであらうと美男なり
美男子のさても毒々しいネクタイ
美男子に自惚れの汗光つてゐ
美男子である鳥打のかぶり様
(軸) 自からの決き美男は悔を知り

柳 人 卷 二 夢 迷 荒 路 祥 月 柳 人 逸 行 文 兒 糸 葉 砂詩朗

氣紛れなのが勝つてゐる競馬場
氣紛れにあらず四十の戀を知る
氣紛れへ鮎が一匹釣れて来る
氣紛れな戀に子供が出来てゐた
氣紛れの氣紛れに飽た若且那
氣紛れに髻を生やして二男なり
氣紛れが好きで戀人とも云はれ
氣紛れに出す葬式ぢやありません

天 痴 人 糸 葉 柳 人 糸 葉 夢 迷 逸 行 砂詩朗 柳 人

氣紛れに白粉が要り紅が要り
子等の掌にしつかと銀貨汗ばみて
大理石銀貨冷たく受取られ
ポケットの銀貨せつかな音で鳴り
(佳) 戀すまじ銀貨一つもまゝ
(同) 懐の夜は銀貨の落ちた音で
(同) 懐中は銀貨だけなり純喫茶

海女の子は潮に吹かれた砂とじて
青春を海女水を抱き海を抱き
葬式に海女はやつぱり女です
戀知つてからは内氣な海女となり
日焼した海女の乳房に男の子
健康が生活に勝つ海女の色
海原と藻と水中の生活線
情熱の肌おしげなく海女のある
海女深くもぐつて生きてゐる

卷 二 人 選 逸 行 卷 二 砂詩朗 夢 迷 文 兒 柳 人 柳 人 柳 人 卷 二 迷 選

川柳 竹原句會 (廣島)
雜社 九月二十九日夜

兼題 愛 於藤原登仙居 町田承春報
犬なごを愛し子の無い夫婦ある
東京へ重なり合ふた餅が着き
兩親 愛に伸び行く健やかさ
子の愛に野良の仕事も苦にならず
子の愛に不幸な縁に諦める
(五) 片親の愛童心にも淋し
(五) 愛の巢へ母がこつそり尋き來

帆 選 承 春 承 春 彌 生 芳 泉 蛙 庵

祝カナメ喫茶店

九月拾八日

奥野亮山報

板圍いとれて明るく店開き
出前箱たらぬ初日のおもしろさ
呑んでゐるのが濟まぬほどは

夕 禿 山
水 鐘 車

光 笑 會

(大阪)

十月十一日

於カナメ 里十九報

兼題 開 店

綠 雨 選

開店日勝手口よりゆすりに來
開店にせかされてゐるいそがしさ
開店へ電氣のつかぬ一とところ
開店にまだ釘の要るとこがあり

あき子 雅彦 與三郎 彩池 里十九 禿山

(佳)開店の主人火鉢へけつまつき
(同)開店に荷物忘れた客も出來
(同)開店のこゝへ植木が欲しい
(同)利久履いて來て開店へ喜ばせ

かほる 綠雨 寒木 與三郎 彩池 里十九 禿山

兼題 手 摺

かほる 選

濡れタガール手摺がけて帆を敷へ
大阪もこゝは場末の手摺なり
銀削は手摺の切れたとも見せ
見上げる手摺へ社長等の顔

禿山 綠雨 史呂 雅彦 木選

すれてゐる手摺へ機嫌とるおやじ
ちと酔ふて手摺の風にかかれて居
酔はされて手摺に凭れば女來る
(佳)ラプシュー最初は手摺に交

禿山 綠雨 史呂 雅彦 木選

床の間の隅の埃を氣にしてゐる
床の間に奥傳といふ腕をみせ
神經質床の間のある部屋を借り
團體の荷物はみんな床の間に

禿山 與三郎 史呂 彩池 史呂 木選

席題 初 會

禿 山 選

初會からにくめぬ人と感じたり
初會から凄い二人のたまし合ひ
初會たゞ印象は片ふくぼ
(佳)名は歳は故郷はと訊く初會
(同)秋の雨見える初會のうぶな客

白葉 寒木 史呂 彩池 與三郎

兼題 支那料理

與三郎 選

支那料理唯哀愁をこめて弾き
支那料理おやち支那人かと問は
支那料理どつきり盛つた皿が來る
支那料理どつきり盛つた皿が來る

寒木 里十九 彩池 禿山

綠 雨 居 偶 會

橋本綠雨報

十月九日夜

野心もつ給仕離さぬ講義綠
子を持たぬ人は給仕をしかるなり
得點の開きを給仕見てかへり
人馴れせぬ給仕は父母のこと
吸殻をすてる給仕の獨言

與三郎 禿山 白葉 綠雨 彩池

耕 一 路 小 集

(松山)

九月十一日夕

春峰改 石丸晴朗報

夕焼けを一羽の鳥鳴いてすぎ
夕焼けをキレイに刷ッガフセツト
物心ついて夕焼交戀し
夕焼けへ工場の煙ありつたけ

晴朗 耕一路 晴朗 靈子 晴朗 選

柱鏡・大笑ひ 互

出勤へ柱鏡のをぞく辯
昔をむけて住鏡のせますぎ
ありつたけ顔をくすした大笑ひ
大笑ひそれから母の咳になり
大笑ひ下女があつけにとられて居
大笑ひつんばにつこり笑つて居

晴朗 靈子 耕一路 靈子 晴朗 晴朗

風水害御見舞

道般全關西を襲つた風水害の慘狀を承
りましてお氣の毒に堪えませんが、罹災
の柳友諸兄に心から御見舞申上げます

満洲國熱河省凌源小西街

カフエー モダン

岩崎 柳路

年賀名刺廣告募る

一口五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の
方に限り金七圓、一口分原稿はなるべ
く簡単に願ひます。

▽申込期限 十二月十日迄

(二月號二掲載)

大阪市天王寺區上汐町五一

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告申込は成るべく振替を御利用の上
前金に願ひます(三錢以下の切手代用
でも差支ありません)

編輯の窓 山雨樓

▼別項の通り本社事務所が移轉した。その關係と印刷所の都合で本號は大變遷刊となつたが御諒承を願ひたい。

▼編輯局も精銳新に加つて、大いに誌面の刷新に努力する覺悟であるから、一層の御聲援と御鞭撻をお願ひする。

▼路郎主幹は十月特に多忙の中を、巻頭其の他に執筆して頂いた。

▼啞三味氏の「川柳のもつ限界」は本號で完結した。本論について氏と信念を同ふする僕は柳壇の反響に耳を澄ましてゐる。

▼大 文芳氏の「木枯忌」については熱誠なる提唱、紳樂氏の隨筆も愉快である。

▼月評の夜には他に協議事項もあつて、時間が不足であつたが汀柳、華水、豆秋氏等の新らしい顔振れを揃えて賑かであつた別項の通り名所物川柳は十

二月號を以て、大阪の巻を一先づ終り、新年號から東京の巻を初めることになつた。盛んに佳吟を投ぜられんことを望む。

▼本號の柳壇畫報には珍らしいものが集つた。今後も折にふれ變つた寫眞、近影等を寄せられたい。

▼某人君の「犬のテッサン」は同君の句の背後のものを示してゐる。不相變才筆である。

▼「兄弟を語る」は誌面の都合で次號に割愛した。

▼多年本誌の爲め援助せられた客員長野吉高氏が逝去せられたので、次號にはその追悼記を掲げます。

▼前號本欄で噂を傳へた松山の川柳大會は、都合で來春に延期された。

▼養ヶ池支部の靜太君が十月二十七日來訪された。刀根山の新館大廣間で路郎先生の講演會（十一月十一日）を開き百五十名位集めたいと楽しんでゐた。

▼その靜太君が個人誌「樋」を出した。美しい純情と川柳を愛する情熱で染めてゐる。

本社十一月例会

日時 十一月六日（火）午後六時半

場所 道頓堀俱樂部（大阪市南區日本橋南詰）
東入南側 電話南二七四八番

兼題 名所川柳「淀川、安治川、大阪の巻、木津川」 三句 麻生路郎選

兼題 同 「宗右衛門町」 三句 麻生路郎選

兼題 「紅葉」 三句 關本雅幽選

會費 三十錢 兼題 右兼題中「宗右衛門町」は句會案内發送後追加したものです。

○今回

食滿南北氏

が本社客員たることを快諾されました。

○次の二君が本社同人として入社されました。

西 いわを
青 木 史 呂

○山本雨迷 増位汀柳の

兩君は編輯局同人となられました。尙山本雨迷君は橋本綠雨君の後を繼いで本總務を擔當せられました。橋本綠雨君は總務待遇とします。

○本社客員長野吉高氏は十月十六日逝去せられました。謹んで哀悼の意を表します。

投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼ 各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▼ 文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▼ 書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第一號課題

十一月五日締切

(各題十句以内)

寫眞 阿部 閑 生選

招待 前田 五 健選

第十二卷第二號課題

十二月五日締切

(各題十句以内)

自慢 長崎 柳 秀選

面會 姫田 夕鐘 共選
市場 沒食子

每 號 募 集

近作柳樽(千句) 麻生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

事務所が移轉いたしました。社務一切は事務所宛。

定 價

一 部 金參拾錢
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませ。御相談に應じます。

▼ 御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼ 誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼ 送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼ 御希望により集金郵便を差立てますが御不在にでも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼ 御注文には何月號よりと御指示願ひます▼ 轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼ 川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年十月廿五日印刷

昭和九年十一月一日發行

第十一卷 第十一號
(毎月一回一日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
 發行所 川柳雜誌社
 電話天下茶屋二五七九番

事務所

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
電話南六四四番

寶 掘 店

(大阪) 大賣捌 二盛社書店 明文堂 其他 市内 各書店
 (東京) だん 東京堂 やつ 吉川書店 あさ 玉森堂(神戸) 米田、
 寶文館(函館) 石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

川柳雜誌案内

大體活字十四字前五行金五十錢、一行附すご
ごに金十錢(但し前金可手代用可)、その他
改題、修版、句案案内、柳葉廣告、その他

並製**合本特賣**
「川柳雜誌」の合本第二卷
より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**
大阪市内送料 壹册 六錢
市外送料 壹册 廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社

懸賞**川柳募集**
題「暮」 路郎 選
十一月十日締切

その他種吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

川柳まやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢

東京淺草區小島町二の二七
川柳まやり吟社
(取次所)川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌(川柳の雜)に
掲載ある川柳に關する記
事の切抜

▼川柳家の集合寫眞、個人
寫眞

▼川柳の短冊、色紙
右の品雜誌の編輯上必要、付
御贈與下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三
橋本 綠 雨

螢ヶ池句會

日時 日時十一月十一日
(午後一時)

所 刀根山病院
題 「霜」郊外)各五句
係、田中のぼる

劍花坊追悼全國川柳大會

日時 十一月十八日(日)正午
會場 東京市芝公園内金地院
會費 五十錢 記念品進呈

宿「影」二句 井上信子選
題「聲」二句 佐瀨劍珍坊選
届先 東京市中野區大和町一
七一 柳樹寺川柳會
締切 十一月十一日

席題 三題 選者未定
主催 全日本川柳吟社

柳壇近況

一、川柳家の消息
一、柳界ニユース
一、柳誌の創刊、廢刊
一、柳書の刊行

▼その他の主なる諸事項を本誌にて紹介を致しますから皆
様から御投稿を願ひます。

▼採否は編輯局一任のこと。
大阪市天王寺區上汐町一ノ五一
川柳雜誌社編輯局

道ブラから天牛へ
賣書籍

天牛本店

大阪市南區日本橋南詰東入南側
電話 南 二七四九番

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選
主として、家庭 演藝、花
柳に關するもの
用紙ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ッ橋南
大阪朝報社
増位 汀柳宛

川柳手拭

路郎主幹の染筆

金二拾錢(送料共)

社告

本社の例會案内希望の方は左
記へお知らせをお願ひします

大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

清 酒

白鶴禮讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたい、話
 い、酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

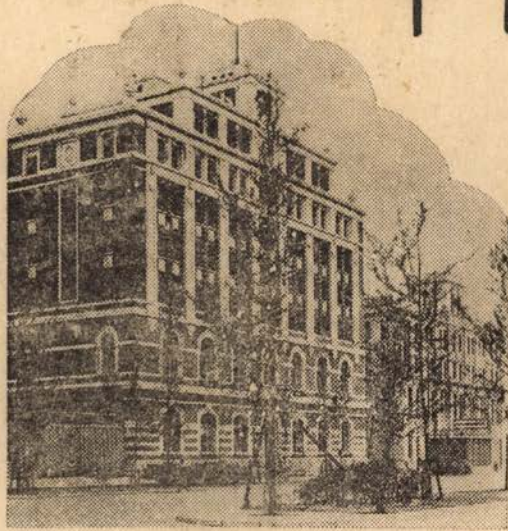
攝津灘

嘉納合名會社釀



日本の會社 日本の保險

一番大きな會社であること。一番すぐれた内容を持ち一番信頼出来る會社であること。保險料は安く而も多額の配當を行ひ、又優秀寛大な保險約款に依り親切な取扱をする會社。つまり會社もその提供する保險も理想的な會社。これが日本生命である。



日本生命

大坂東區今橋四丁目

大正十三年三月三日第三種郵便認可(第一四一) 昭和九年十月廿五日印刷(第一四一) 昭和九年十二月一日

川

誌

誌

誌

第一三〇號

號

號

號

號

號

號

號

號

號

號

號

號

號